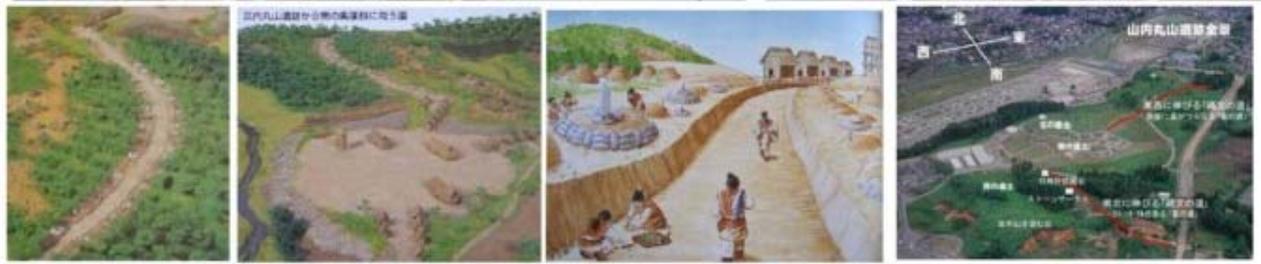


縄文の心を映すストーンサークル

- 縄文の円環を訪ねて -



鹿角 大湯ストーンサークル



鷹巣 伊勢堂岱遺跡



青森 小牧野遺跡

みなさんには どのように 映りますでしょうか

平成19年7月作成

平成21年1月整理改訂

Mutsuo Nakanishi

縄文の心を映すストーンサークル

縄文の遺跡を訪ねて 風来坊 縄文の円環遺構 レビュー



鹿角 大湯ストーンサークル と 青森 小牧野ストーンサークル
みなさんには どのように 映りますでしょうか

2007年 7月 By Mutsu Nakanishi

- 三内丸山縄文遺跡で、縄文人の精神世界を語る赤坂憲雄さんの講演に魅せられて、訪ねだした縄文集落の中心の広場に眠る祖先・死者をサークル状に取り囲んで住居を建てて暮らす縄文人 そんな縄文人が作った「ストーンサークル」

◎ ストーンサークルは縄文の心・世界観を映す

◎ 「戦さ・穢れをしらず、死者を忌み嫌わず、心やさしき縄文人」

そんな言葉にも魅かれています。

ストーンサークルに魅かれるのはその円環ばかりでなく、日時計状遺構の存在

この円環と石柱 これが何を表し、一体となってどんな縄文の心・世界観を表すのだろうか・・・

「縄文人の心」が共同墓地のある広場を住居群が取り囲む縄文の環状集落を作り上げ、「ストーンサークル」絆の象徴とした共同墓地・共同祭祀の場を作る。北海道の周堤墓や北陸・越後のウッドサークルも同じ趣旨であろうか????

縄文土器などにもこの「サークル」・「渦巻き」文様が繰り返し描かれている。そして、このサークルを立体的に構造化する「木柱」・「立石・石棒」の存在。

この資料を整理している途中で ストーンサークル・立石と木柱が建つ糸魚川市の縄文遺跡 寺地遺跡のジオラマを見ました。縄文集落はこんなだったのか・・・と今まで見てきた縄文集落やストーンサークルなどをだぶらせていました。

この縄文人が残した「サークル」と「柱」・立石・石棒はどんな願いがこめられているのだろうか

今 何を感じればよいのか

今まで訪れた縄文遺跡を もう一度 引っ張り出して
この視点で整理してみました。

かつて、訪ねた縄文人の円環遺構のアルバムを提供します
皆さんには どのように映るでしょうか……



木柱列とストーンサークルの高方がある 寺地遺跡縄文晩期 配石遺構のイメージ図
新潟県歴史博物館ジオラマより



縄文後期のモデル ストーンサークルと周堤墓

縄文人の「円」と「柱」は何をあらわすのか・・・



大型化した大集落が 縄文中期末以降の寒冷化による森や海の変化によって、集落が維持できず、分散移動を余儀なくされた集団の共同墓地・祭祀の場所と考えられている。また、石棒は生殖・再生のシンボルといわれている。でも、集落内に立つ立石の数々や巨大柱にまで広げると もっと広い永遠・「再生・命の継続」と言った願いがこめられているのではないでしょうか・・・

三内縄文遺跡で講演された森本哲郎氏はこの「柱(ハシラ)・ハシ」の言葉に「異界をつなぐ」という意味を説き、後に「端・橋・箸・梯・柱・舂」などに当てられる意味から「天上と大地 生者と死者」をつなぐシンボルを見る。

諏訪大社御柱祭 伊勢遷宮御柱はそんな縄文の祭祀の今の姿なのかもしれない。

「縄文人は素晴らしい景色が広がる高台に住んでいた」が私の縄文遺跡を巡った印象。

それからすると私の感じもそれに近い。

「柱」に「異界をつなぐ」意味を見出し、「サークル」は「大地・自然・集落」か???

「円」と「柱」は それこそ森の民 縄文人が毎日みなれた森、畏敬する自然か

そして、それらを通して亡くなった祖先と対話し、永遠と再生を願う。

石棒を中心に回りに石を配する三内丸山遺跡の小型のストーンサークル墓が立ち並ぶ墓の道埋葬された死者が天空と大地・村を通う出入り口がストーンサークルではないか????

そしてこの円環が大地・村・自然へと広がっていったのではないか???

もちろん、死者と生者とをつなぐ?????

これらと同じようにして、数々の縄文の円環が意識され、展開して行ったのではないだろうか・・・

1. 縄文が色濃く残る東北には今も屋敷庭墓が残る。
2. 縄文の竪穴住居の入り口付近には、幼児・胎児を埋葬した甕と石棒、
3. 広場・墓地を中心とし住居がそれを取り囲む環状集落
4. 土偶、縄文土器 現代に通じるダイナミックなエネルギーとその形・文様にこめた願いと折り

これらの縄文時代を代表する精神文化・遺物も 「縄文の宝物」として、輝いて見える。

天空にまっすぐ立つ巨木にエネルギーを感じて数々のモニュメントが造られた「円+柱」。それが 生活の場「村・大地」そして「山」「森」の「自然」を表わし、「自然への畏敬と対話を通じて、共に永遠の命を願う心」が「縄文の心」「日本人の心」として今にまで 連続とつながっているのではないか???

縄文遺跡に立ち、眼前に広がる大自然のパノラマの爽快感を味わいながら、そんなことを思い浮かべます。

縄文遺跡そして ストーンサークルに代表される円環遺構にどんなイメージを感じられるのでしょうか???

私の今までに歩いた縄文遺跡の円環遺構をそんな視点でリストアップして、整理しました。

○ 参考資料

1. 三内丸山発信の会「縄文ファイル」 赤坂憲雄氏および森本哲郎氏講演・対話ほか
2. 縄文文化の超自然観 -死と再生のシンボリズム- 明治大学蛭川研究室公開資料 世界の人類学より 整理
http://www.kisc.meiji.ac.jp/~hirukawa/anthropology/area/ne_asia/Jomon/index.htm
3. 発掘された日本列島 2005 & 2006 ほか
4. 三内丸山遺跡から縄文列島へ「縄文文化の扉を開く」
5. 三内丸山遺跡と北の縄文世界 ほか
6. Mutsu Nakanishi H.P. 「和鉄の道縄文遺跡を訪ねる Country Walk」遺跡訪問記より

「 縄文の心を映すストーンサークル -縄文の円環を訪ねて- 」

1. はじめに

- 縄文人の精神世界を語る赤坂憲雄さんの講演に魅せられて、縄文を訪ねだしました
 - ◎ ストーンサークルは縄文の心・世界観を映す
 - ◎ 「穢さ・穢れ をしらず、死者を忌み嫌わず、心やさしき縄文人」
「日本人の心・和(環)を以って 貴し」
- ストーンサークルに魅かれて
ストーンサークルに魅かれるのは その円環ばかりでなく、日時計状遺構の存在
これが なければ、こんなに魅かれられないだろう この円環と日時計状遺構が人をひきつける
この円環と石柱 これが何を表し、一体となって どんな縄文の心・世界観を表すのだろうか・・・
- 縄文人の作り出した円環遺構
土器文様をはじめ、縄文人は自分たちの生活の中で 数々の「円環」「同心円」のパターンを繰り返し使っている。
そして、彼らの残した遺構にも数々の「円環」が現れる。
環状集落 環状・馬蹄型貝塚 馬蹄型盛土 環状列石 周堤墓 ウッドサークル

そんなことに魅かれて、縄文のストーンサークルはじめ、縄文人が作り出した円環遺構を訪ねました。

これには結論がありません。

わたしの話もかつて、訪ねた縄文人の円環遺構のアルバムを提供しますので、それぞれで、考えていただきたい。

2. 定住村の形があらわす縄文の「精神文化・世界観」を考える【中西の勝手な思い】

1. 共同基地のある広場を住居群が取り囲む縄文の環状集落

岩手県西田遺跡・長野県梅ノ木遺跡・井戸尻遺跡・是川風張遺跡・御所野遺跡

そして、小さなストーンサークルが道脇に建ち並ぶ墓の道がある三内丸山遺跡

この心が自然と円環集落を作り上げ、自然の中にある「円」と「柱」を強く意識させた????

2. 縄文人の精神文化を支える「円」と「柱」

- 円柱と柱に「自然への恵みと畏敬」「命・再生の願い」をかけたのではないかな???????

円 : 自然 大地・太陽

柱 ハシ・ハシラ : 天上と大地 生者と死者等々異界をつなぐ (森本哲郎さんの説)

諏訪大社 御柱祭 伊勢遷宮御柱 端・橋・箸・梯・柱・桴

天空にまっすぐ立つ巨木にエネルギーを感じて 数々のモニュメントが造られた

「円+柱」で 生活の場「村・大地」そして「山」「神奈備山」へと広がったのではないかな?????

- 石棒を中心に回りに石を配する三内丸山遺跡の小型のストーンサークル墓が立ち並ぶ墓の道

埋葬された死者が天空と大地・村を通う出入り口が そのストーンサークルではないかな????

そして この円環が大地・村・自然へと広がっていったのではないかな???

もちろん、死者と生者とをつなぐ 再生のシンボル ?????

これら数々の縄文の円環を意識し、縄文の社会・文化が展開して行ったのではないだろうか・・・

1. 縄文人は死者を忌み嫌わぬ文化 それが連綿と東北には続く 屋敷庭墓⇄西日本埋葬墓と祈り墓の両墓製
2. お産・血に対する穢れ意識がない 住居内でのお産・住居の入り口付近に幼児・胎児の埋葬と石棒
3. 広場・墓地を中心とし 住居がそれを取り囲む環状集落 墓を作る意味
4. 土偶 土偶はすべて女性 土偶に込めた願い
5. 縄文土器 現代に通じるダイナミックなエネルギー その形・文様にこめた願いと祈り

○ 参考資料

1. 「縄文の自然観」 明治大学蛭川研究室 公開資料より
2. 赤坂憲雄講演・対話 三内丸山発信の会「縄文ファイル」より

3. ストーン サークル形成の目的と意味

- 定住生活と協業と階層の発生
- 定住化による人口増・気候の変化に伴う分村
- ストーンサークルの目的
 1. 分村にともなう共同祭祀の場
 2. 分村に伴う共同の墓
 3. バラバラになった村をつなぐ 階層の発芽

4. ストーン サークルの変遷

- 三内丸山墓の道小型ストーンサークル→集落内ストーンサークル→集落外ストーンサークル
集落外ストーンサークルの位置 交通の要衝・地域を隔てる境界
三内丸山遺跡・長野県大野遺跡・大湯遺跡

5. 縄文の心を映す「縄文の円環遺構」

1. 環状集落	
岩手県西田遺跡	中期中葉 約 4500 年前の環状集落遺跡 直径 150 メートルを優に超える本遺跡の環状集落は中央広場を囲むように大小多数の掘立柱建物群、その外周を住居群、さらにその外周を貯蔵穴群が 2 重・3 重にめぐり重環状構造をみせており、広場からは列状に分布する少数の墓を中心に放射状に配列された 200 基近い土壇墓群が発掘されている。
長野県梅ノ木遺跡	中期 5000 年前の遺跡 南アルプス・釜無川を見晴らす茅ヶ岳の山麓の台地 100 軒を越える竪穴住居が広場を囲んで そっくりそのまま見つかった。谷への水場へ向かう道・作業場も。 縄文のモデル村が具体的な姿をあらわした。
2. 環状貝塚・馬蹄形盛土	
千葉県 加曾利貝塚	都川上流の台地上にあり、縄文中期の直径約 130m の北貝塚と縄文後期の約 170m の南貝塚から成る日本最大の貝塚。単なるゴミ捨て場ではなく、周縁の集落の共同作業場(貝の干し場等)との考えがある。貝塚から貝を煮詰めた痕跡なども出ている。 加曾利 E 式土器・B 式土器の標式遺跡としても名高い。
岩手県 御所野遺跡	縄文中期後半 4500 年前の大規模集落。 中央部広場に二つの隣接した配石遺構と土坑墓が中心に向かって環状に取り囲む。配石遺構はところどころに土坑墓の上に造られている。この周囲に 3 つの住居群(掘立柱住居群・竪穴住居群)が取り囲み、あわせて 600 軒を越える住居跡。 また広場の片側に盛土遺構 また焼失住居から屋根に土が乗っていた。
北海道 垣の島遺跡	南茅部町の現在の海岸線から標高で 50 メートルほどあがった比較的平らな海岸段丘でほぼ完全な馬蹄形の盛土遺構が見つかった。西北西に開口部を向けて、長軸が約 120 メートル、短軸が約 95 メートル、盛り土自体の高さは 1~2 メートル、幅は約 15 メートルほど。盛り土が作られたのは縄文時代後期初頭(約 4000 年前)盛り土としては、最古の時代に遡ると思われる。
青森三内丸山遺跡	縄文時代を代表する中期 5000 年前の大規模集落 6 本柱・大型住居・墓の道・栽培植物・盛土遺構・土偶や土器はじめ大量の種々の出土品の多さと広く各地との交流等々 縄文観を変えた遺跡で世界遺産登録を目指す
3. ストーンサークル・環状列石	
三内丸山遺跡墓の道	縄文中期 4500 年前 村の中心へ向かう 2 本の大きな道 その道の両側には 墓が並び その上に小さな配石遺構・ストーンサークルが立ち並びストーンサークルの原型
長野県 大野遺跡	縄文中期後半 4000 年前の遺跡で、中央広場に直径 20m のストーンサークルがほぼ完全な形でみつかり、その周りを住居群が取り囲む。集落の中にあるストーンサークルとして、次の時代の集落外ストーンサークルへと発展する注目遺跡
青森県 小牧野遺跡	縄文後期前半 4000 年前 青森市の郊外南部の荒川と入内川に挟まれた舌状台地の標高 140m 付近に位置する縄文のストーンサークルを代表する一つ。円環を構成する区分それぞれが石組構造になっていて、膨大な日数と労力をかけて作られており、縄文人の組織力を見せつけるモニュメント。3 重構造の環状列石のほかに竪穴式住居跡、土器棺墓や土坑墓群、貯蔵穴や遺物の捨て場、湧水遺構、道路跡等が見つかっている。ストーンサークルの内側と外側の輪の間からは、「甕棺土器」と呼ばれる土器で作った棺が 3 つ埋められた状態で見つかっている。 甕棺土器は、一度墓に埋葬した遺体を、数年後に肉が朽ちた後に取り出し、その取り出した遺骨を再び埋葬するための骨壺であると考えられている。
秋田県伊勢堂岱遺跡	縄文を代表するストーンサークルの一つ。雄物川に近接する大館能代空港近くの標高 40~45m の台地上に位置する、縄文時代後期前半(今から約 4000 年前)の大規模な遺跡で、A~D の 4 つのストーンサークルや墓、掘立柱建物跡、土壇墓、捨て場など、多くの祭り・祈りの施設・道具(ヒョウタン形の土器や板状土偶、キノコ形土製品など)もみつきり、墓場・祭祀の場と考えられている。 4 つのストーンサークルからやや離れた場所に、日時計型組石???が数個みつきり、この組石の中心からストーンサークル A を見ると、夏至の日に太陽が沈む位置とだいたい一致すると考える説もある。
秋田県大湯環状列石	野中堂、万座に所在する 2 つの環状列石を主体とする縄文時代後期(約 4000~3500 年前)の大規模な集落跡。縄文を代表するストーンサークルの一つで、ストーンサークルの完成形と考えられている。 約 130 メートルの距離をおいて東西に対峙する野中堂と万座の環状列石。いずれも 100 基以上の配石遺構の集合体で、特殊な位置を占める「日時計型組石」1 基以外は全て 2 重の環状(外帯・内帯)に構築されている。なお、両列石の規模は野中堂環状列石が径 42m、万座環状列石が径 48m である。組石は万座では 48 基、野中堂で 44 基。それぞれの組石の下に墓壇があることや副葬品が発見されたため大規模な共同墓地と考えられている。さらに万座の周辺調査から掘立柱建物跡群が巡らされていたことが明らかになり、これらは墓地に附属した葬送儀礼に関する施設ではないかと推測されている。また、大湯環状列石には日時計型組石があり、この日時計中心部から環状列石中心部を見た方向が夏至の日に太陽が沈む方向になっている。

北海道 鷲ノ木 5 遺跡	<p>北海道森町の海岸線から 1km 内陸 標高約 70m の台地に位置する縄文後期前半(約 4000 年前)の環状列石で同時期の集団墓地と考えられる竪穴墓域とともに発見。</p> <p>駒ヶ岳のすぐ下 厚い火山灰でバックされていて良好な保存状態。石の上のほうが埋まりきらずに見えていたために発見された。環状列石は、外帯・内帯・中央帯の 3 重に石が丸く並べられ、これまでの調査では石の下にお墓はない。外側の形はやや楕円形で、長軸約 3.7メートル、短軸約 3.4メートル。外帯と内帯はおよそ 0.5メートルの幅で巡らされ、内帯は長軸が約 3.5.5メートル、短軸が約 3.3メートル。中央帯は環状列石の中心部にあり、長軸 4メートル、短軸 2.5メートルの楕円形。</p> <p>環状列石の石の数は約 530個あり、穴を掘って埋め込まれているものやそのまま置かれたものなどが見られ、大きさは 20~60センチメートルほどの平状と棒状の石を桂川の川原から運んで来たものと考えられる。また、環状列石をつくる前には、あたりの地面を削って平らにする大掛かりな土木工事をしていたことが地層の観察からわかった。出入り口と考えられる部分や、埋設土器とよばれるもの 1ヶ所が見つかりました。これ埋設土器は乳幼児を入れて埋葬したり、遺骨が骨になった段階で再埋葬するのに使われたものと考えられている。また、環状列石に接して発見された墓域は大型の竪穴(最大 11.5m)を掘り込んだ中に大小 11 基の土坑墓。</p> <p>この墓域は縄文末期 3000 年前に北海道でみられる周堤墓の原型とも推定されている。</p> <p>環状列石のまわりには、竪穴式住居など集落の跡が見つからず、ふだんの生活の場所とは離れた葬送や祭祀を行う神聖な場所と考えられます。</p>
北海道 忍路遺跡群	<p>約 3,500 年前縄文時代の後期のストーンサークルで、この時代に出現する「区画墓」と呼ばれる集団の墓地と考えられている。小樽市街を抜けて西へ海岸沿いを余市のほうへ 10km ほど行った標高約 130m の三笠山の麓にある。大きさは現在の指定の面積で 821 平方メートル、直径は南北約 33m・東西約 22m の楕円形でサークルは 2~3m の幅に高さ 10~20cm の小石を環状に重ね置き、その内側に高さ 100~200cm の大石を配置されている。石材はその一部を、余市町のシリバ岬一帯の柱状節理の輝石安山岩に求めている。近代になり、一部手を加えられ、造られた当時とは異なった所があります。</p> <p>この環状列石の北側に隣接する同じ時代の忍路土場遺跡から巨大木柱が発見されており、環状列石と関連する祭祀的な遺跡と考えられ、大量の土器、石器、建材、漆製品、等が出土。</p> <p>小樽・余市の間はストーン・サークルの密集地帯で、ほかに地鎮山のストーン・サークル、余市町西崎山のストーン・サークルがある。地鎮山のストーン・サークルはあきらかに墓の様相を呈している。</p>
4. 周堤墓	
キウス周堤墓群	<p>縄文後期(約 3000 年前)の集団墓地 千歳市キウス周堤墓 千歳市の中心から東方 9km、石狩低地帯を望む馬追丘陵南西麓のゆるやかな斜面に立地。地面を丸く掘り、掘った土を周囲に土手状に積み上げ、その内側が墓地になっており、周囲に堤があることから「周堤墓」と呼ばれている。キウス周堤墓群 7 基の墓のうち、最大のもは直径が 75m にも達します。土手の上から竪穴の床までの深さは 5.4m、最も小さな墓の直径は 20m です。現在、キウス周堤墓群とその周辺には 24 基の墓が見つかっている。</p>
5. ウッドサークル 環状木柱列	
石川県 真脇遺跡	<p>金沢市西南部にある縄文時代後・晩期の集落遺跡 環状木柱列(ウッドサークル)</p> <p>直径約 80cm ほどのクリの木を縦に半分に割った巨大な木柱を直径約 7m の環状に立て並べた環状木柱列が重複して発見され、縄文人の木工技術の高さを示すと共に、その性格を巡って注目を集めた。環状木柱列は柱の根元が残るだけで上部の構造は推測するしかなく儀礼の場や特殊な建物などいろいろな考えが出されているが、今のところはっきりとしない。</p> <p>直径 30~85センチメートルの巨木が総計 347 本も発見され、それら木柱の多くは縦に半分に割られ、断面がカマボコ形になっているものや U 字形に加工されている。これら木柱のうち直径 50 センチ以上の 23 本の巨大な木柱は、集落の中央広場付近に 8~10 本が組みになって、直径 6~8 メートルの円形に規則正しく並べて立てられ、環状木柱列が重複して出土。これら、木柱根の出土が縄文時代の遺跡の中で極めて多く巨木文化の存在が考えられ、祭祀施設と想定されている。</p> <p>縄文時代の前期初頭(約 6000 年前)から晩期終末(約 2300 年前)まで、約 4000 年の間繁栄を続けた長期定住遺跡。能登半島の先端から少し内海に入った入江の奥にあって、採集・漁撈の生活を営む集落で、標高 4~12m の低地に位置する湿地遺跡であったため、普通は腐って残りにくい動植物で作られた遺物が大量に保存されていた。特に前期末から中期初頭(約 5000 年前)の層から大量のイルカの骨が出土し、その数の多さから真脇の縄文人はイルカ漁を行っていたと考えられている。</p> <p>また中期中葉(約 4500 年前)の層からは板敷き土壇墓が 4 基見つかると、晩期(約 2800 年前)の土層からは巨大なクリの木を半割りし、円形に立てて並べた「環状木柱列」が見つかった。</p> <p>木柱列はクリ材の半円柱 10 本で直径 7.4 メートルの環状に取り囲み、各々の柱を半分に割り、丸い方を円の内側に向けている。その太さは直径 80~96 センチもある。小さな環状もあり、環状木柱列は何度も立て替えられたと考えられる。</p>

注) 太字で記した遺跡が、訪ねたことのある遺跡 通常字の遺跡は資料・インターネットで引っ張り出した遺跡です

6. まとめ 縄文のストーンサークルとは・・・ (Mutsu Nakanishi の私見 根拠はありません)

縄文の円環遺構・円環紋様は「縄文人の絆・心の象徴」

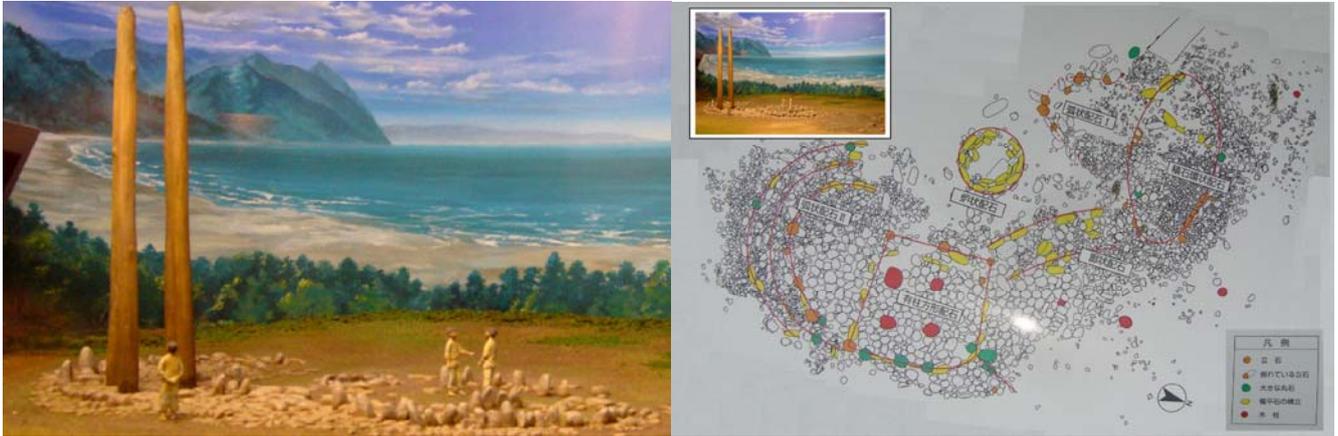
環状集落・ストーンサークル・ウッドサークル・周堤墓・渦巻紋様(土器・土偶ほか)

ストーンサークルは共同基地の性格が強く 同じ意識集団の祭祀の場でもある

再生・命の絆 それを天空・自然に求める縄文

ストーンサークルと日時計状配石・木柱列と御柱 それらは 生者と死者 集団 まだ見ぬ異界をつなぐ象徴
縄文人はそれらを通じて会話しながら 定紋の社会・文化をはぐくんできたのではないか

ストーンサークルと木柱列 その両方が一緒に立ち並ぶ縄文遺跡が、糸魚川 寺地遺跡にあるのをみつけました。
ストーンサークルの東日本・ウッドサークルの北陸・御柱の諏訪・信州の文化圏の重なる
縄文人交流の拠点 縄文の最大の交易品 翡翠の産出地 姫川に近い海を臨む糸魚川市青海の高台
縄文中期から続く翡翠の加工工房集落 糸魚川 寺地遺跡
そのジオラマが新潟県長岡市の県立歴史博物館にあり、当時の縄文の村・円環遺構を再現している



糸魚川市 寺地遺跡 配石遺構 復元ジオラマ と遺構配石と木柱列の配置図

東日本には数々の縄文の円環遺構が見つかった。しかし、西日本・関西では まだ発見されていない
関西にもストーンサークルはあるのだろうか・・・

西日本の縄文人は「縄文人の絆・心の象徴」を何に求め、どこで 祭りをしたのだろうか・・・

神奈備山と磐座 この流れが 西日本の中心か・・・

弥生の時代になると放棄されてしまうが、神奈備山と自然信仰・御柱そして各地に残る磐座は 時代を超えて受け継がれ、日本人の心の象徴として息続いていくのではないか・・・

● まとめ

縄文の心を映すストーンサークル 皆さんには どう 映りましたでしょうか・・・

本当に心休まる静かな空間 でも 関西には まだ 縄文の円環 見つからない

2007.6.6. Mutsu Nakanishi

参考資料

1. M.Nakanishi 縄文のストーンサークル等 訪問 Country Walk

- 縄文人の心を映すストーンサークル 東北 秋田・青森のストーンサークル
<http://www.ne.jp/asahi/mutsuo/nakanishi/jst1a07.pdf>
- 日本最大の大型縄文貝塚 加曾利貝塚遺跡探訪 加曾利縄文貝塚公園
<http://www.ne.jp/asahi/mutsuo/nakanishi/kasori.pdf>
- 北陸・能登に点在する縄文のウッドサークル探訪 金沢チカモリ・能都真脇・小矢部桜町遺跡
<http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/iron/4iron09.pdf>
- 早春と冬が入り混じる「北の大地」を風来坊 北の縄文を訪ねて
<http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/pdfwalk/4walk05.pdf>
- 日本人の心の故郷 縄文の集落がそっくりそのまま見つかった
茅ヶ岳山麓の北杜市梅ノ木縄文集落遺跡を訪ねる
<http://mutsu-nakanishi2.web.infoseek.co.jp/iron2/hskzu01.pdf>

2. 発掘された日本列島 2005 & 2006 ほか

3. 三内丸山発信の会「縄文ファイル」

4. 三内丸山遺跡から縄文列島へ 「縄文文化の扉を開く」

6. 三内丸山遺跡と北の縄文世界

ほか

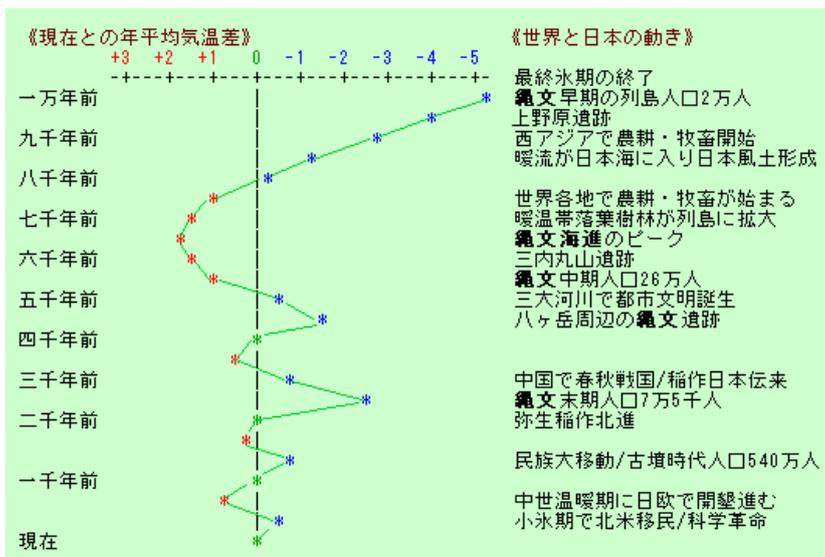
1. 縄文の時代区分と縄文文化

1.1. 縄文時代の 時代区分

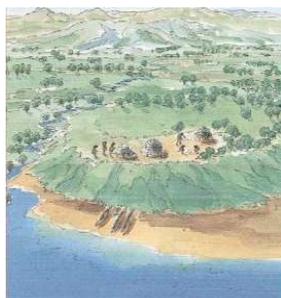
縄文時代は階層を発達させつつあった社会

縄文文化は西暦紀元前 11000 年～紀元前 300 年ごろまで、いわゆる縄文土器によって特徴づけられる文化。

1 万年におよぶ縄文時代は、変化に乏しかったわけではなく、大きな変化があり、通常 下記の 6 つの時代に区切られる。日本列島に住み着いた人たちが、森や川・海岸の高台に定住を始め、集落が形成されると共に、狩猟・採取から栽培・共同漁労など集団・社会を形成してゆく過程にあり、階層を発達させつつあった社会であり、特に中期以降 それぞれの地域で、華やかな縄文文化を展開するとともに、交易・交流も盛んになる。

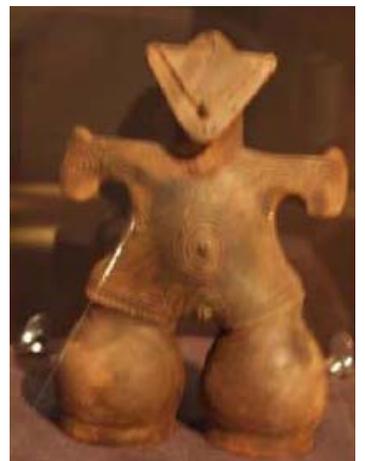


草創期 BC1100 ～ BC7500	土器・石鏃の使用が始まり、定住化が進む。
早期 BC7500 ～ BC4100	小型の土偶つくられる。数個の竪穴住居で一集落を構成する。 縄文の海進が始まる人口約 2 万人。
前期 BC4100 ～ BC2700	竪穴住居が広場を囲んで集落をつくる。気候温暖で海面・気温上昇（縄文海進）進む。現在の内陸部に貝塚。湖沼の発達により丸木船がつくられ漁労活動開始。 常緑照葉樹と落葉照葉樹の豊かな森の形成 人口約 10 万 5000 人。
中期 BC2700 ～ BC2000	立体的文様のある大型土器が流行する。三内磨山遺跡など集落の規模が大きくなり東日本では大規模環状集落が発達。植物の栽培をうかがわせる。 海岸線ほぼ現在に近くなる。大型貝塚形成。石棒・土偶などの呪物が盛んに作られる。石柱祭壇。抜歯の風習が始まる。気温低下始める。人口約 26 万人。
後期 BC2000 ～ BC1000	温暖から寒冷へ。森の様相が変化し東日本では集落移動がおこる。 交易目的の漁労民発生。大型貝塚。製塩土器。製塩専門集団、塩媒介集団、塩消費集団。 伸展葬。大湯環状列石などストーンサークルが東北・北海道地方に集中形成。 ウッドサークル（巨大木柱遺跡）。敷石住居址。人口 16 万 300 人。
晩期 BC1000 ～ BC 350	東日本で亀ヶ岡文化。北九州で水田耕作が始まる。 人口 7 万 5800 人。





国宝「縄文のビーナス」 2003.12.5 尖石縄文考古館



2. 縄文の心を映すサークル 「サークル」遺構のある縄文遺跡リスト

1. 環状集落	
岩手県西田遺跡	中期中葉 約 4500 年前の環状集落遺跡 直径 150 メートルを優に超える本遺跡の環状集落は中央広場を囲むように大小多数の掘立柱建物群、その外周を住居群、さらにその外周を貯蔵穴群が 2 重・3 重にめぐり重環状構造をみせており、広場からは列状に分布する少数の墓を中心に放射状に配列された 200 基近い土壙墓群が発掘されている。
長野県梅ノ木遺跡	中期 5000 年前の遺跡 南アルプス・釜無川を見晴らす茅ヶ岳の山麓の台地 100 軒を越える竪穴住居が広場を囲んで そっくりそのまま見つかった。谷への水場へ向かう道・作業場も。縄文のモデル村が具体的な姿をあらわした。
2. 環状貝塚・馬蹄形盛土	
千葉市 加曾利貝塚	都川上流の台地上にあり、縄文中期の直径約 130m の北貝塚と縄文後期の約 170m の南貝塚から成る日本最大の貝塚。単なるゴミ捨て場でなく、周縁の集落の共同作業場(貝の干し場等)との考えがある。貝塚から貝を煮詰めた痕跡なども出ている。加曾利 E 式土器・B 式土器の標式遺跡としても名高い。
岩手県 御所野遺跡	縄文中期後半 4500 年前の大規模集落。中央部広場に二つの隣接した配石遺構と土坑墓が中心に向かって環状に取り囲む。配石遺構はとこところに土坑墓の上に造られている。この周囲に 3 つの住居群(掘立柱住居群・竪穴住居群)が取り囲み、あわせて 600 軒を越える住居跡。また広場の片側に盛土遺構 また焼失住居から屋根に土が乗っていた。
北海道 垣の島遺跡	南茅部町の現在の海岸線から標高で 50 メートルほどあがった比較的平らな海岸段丘でほぼ完全な馬蹄形の盛土遺構が見つかった。西北西に開口部を向けて、長軸が約 120 メートル、短軸が約 95 メートル、盛り土自体の高さは 1~2 メートル、幅は約 15 メートルほど。盛り土が作られたのは縄文時代後期初頭(約 4000 年前) 盛り土としては、最古の時代に遡ると思われる。
青森三内丸山遺跡	縄文時代を代表する中期 5000 年前の大規模集落 6 本柱・大型住居・墓の道・栽培植物・盛土遺構・土偶や土器はじめ大量の種々の出土品の多さと広く各地との交流等々 縄文観を変えた遺跡で世界遺産登録を目指す
3. ストーンサークル・環状列石	
三内丸山遺跡墓の道	縄文中期 4500 年前 村の中心へ向かう 2 本の大きな道 その道の両側には 墓が並び その上に小さな配石遺構・ストーンサークルが立ち並ぶストーンサークルの原型
長野県 大野遺跡	縄文中期後葉 4000 年前の遺跡で、中央広場に直径 20m のストーンサークルがほぼ完全な形でみつかり、その周りを住居群が取り囲む。集落の中にあるストーンサークルとして、次の時代の集落外ストーンサークルへと発展する注目遺跡
青森県 小牧野遺跡	縄文後期前半 4000 年前 青森市の郊外南部の荒川と入内川に挟まれた舌状台地の標高 140m 付近に位置する縄文のストーンサークルを代表する一つ。円環を構成する区分それぞれが石組構造になっていて、膨大な日数と労力をかけて作られており、縄文人の組織力を見せつけるモニュメント。3 重構造の環状列石のほかに竪穴式住居跡、土器墓や土坑墓群、貯蔵穴や遺物の捨て場、湧水遺構、道路跡等が見つかっている。ストーンサークルの内側と外側の輪の間からは、「甕棺土器」と呼ばれる土器で作った棺が 3 つ埋められた状態で見つかっている。甕棺土器は、一度墓に埋葬した遺体を、数年後に肉が朽ちた後に取り出し、その取り出した遺骨を再び埋葬するための骨壺であると考えられている。
秋田県伊勢堂岱遺跡	縄文を代表するストーンサークルの一つ。雄物川に近接する大館能代空港近くの標高 40~45m の台地上に位置する、縄文時代後期前半(今から約 4000 年前)の大規模な遺跡で、A~D の 4 つのストーンサークルや墓、掘立柱建物跡、土壙墓、捨て場など、多くの祭り・祈りの施設・道具(ヒョウタン形の土器や板状土偶、キノコ形土製品など)もみつきり、墓場・祭祀の場と考えられている。 4 つのストーンサークルからやや離れた場所に、日時計型組石???が数個みつきり、この組石の中心からストーンサークル A を見ると、夏至の日に太陽が沈む位置とだいたい一致すると考える説もある。
秋田県大湯環状列石	野中堂、万座に所在する 2 つの環状列石を主体とする縄文時代後期(約 4000~3500 年前)の大規模な集落跡。縄文を代表するストーンサークルの一つで、ストーンサークルの完成形と考えられている。 約 130 メートルの距離をおいて東西に対峙する野中堂と万座の環状列石。いずれも 100 基以上の配石遺構の集合体で、特殊な位置を占める「日時計状組石」1 基以外は全て 2 重の環状(外帯・内帯)に構築されている。なお、両列石の規模は野中堂環状列石が径 42m、万座環状列石が径 48m である。組石は万座では 48 基、野中堂で 44 基。それぞれの組石の下に墓壙があることや副葬品が発見されたため大規模な共同墓地と考えられている。さらに万座の周辺調査から掘立柱建物跡群が巡らされていたことが明らかになり、これらは墓地に附属した葬送儀礼に関する施設ではないかと推測されている。また、大湯環状列石には日時計状組石があり、この日時計中心部から環状列石中心部を見た方向が夏至の日に太陽が沈む方向になっている。

<p>北海道鷲ノ木5遺跡</p> <p>北海道 忍路遺跡群</p>	<p>北海道森町の海岸線から1km内陸 標高約70mの台地に位置する縄文後期前半(約4000年前)の環状列石で同時期の集団墓地と考えられる堅穴墓域とともに発見。</p> <p>駒ヶ岳のすぐ下 厚い火山灰でバックされていて良好な保存状態。石の上のほうが埋まりきらずに見えていたために発見された。環状列石は、外帯・内帯・中央帯の3重に石が丸く並べられ、これまでの調査では石の下にお墓はない。外側の形はやや楕円形で、長軸約3.7メートル、短軸約3.4メートル。外帯と内帯はおよそ0.5メートルの幅で巡らされ、内帯は長軸が約3.5.5メートル、短軸が約3.3メートル。中央帯は環状列石の中心部にあり、長軸4メートル、短軸2.5メートルの楕円形。</p> <p>環状列石の石の数は約530個あり、穴を掘って埋め込まれているものやそのまま置かれたものなどが見られ、大きさは20～60センチメートルほどの平状と棒状の石を桂川の川原から運んで来たものと考えられる。また、環状列石をつくる前には、あたりの地面を削って平らにする大掛かりな土木工事をしていたことが地層の観察からわかった。出入り口と考えられる部分や、埋設土器とよばれるもの1ヶ所が見つかりました。これ埋設土器は乳幼児を入れて埋葬したり、遺骨が骨になった段階で再埋葬するのに使われたものと考えられている。また、環状列石に接して発見された墓域は大型の堅穴(最大11.5m)を掘り込んだ中に大小11基の土坑墓。</p> <p>この墓域は縄文末期3000年前に北海道でみられる周堤墓の原型とも推定されている。</p> <p>環状列石のまわりには、堅穴式住居など集落の跡が見つからず、ふだんの生活の場所とは離れた葬送や祭祀を行う神聖な場所と考えられます。</p> <p>約3,500年前縄文時代の後期のストーンサークルで、この時代に出現する「区画墓」と呼ばれる集団の墓地と考えられている。小樽市街を抜けて西へ海岸沿いを余市のほうへ10kmほど行った標高約130mの三笠山の麓にある。大きさは現在の指定の面積で821平方メートル、直径は南北約33m・東西約22mの楕円形でサークルは2～3mの幅に高さ10～20cmの小石を環状に重ね置き、その内側に高さ100～200cmの大石を配置されている。石材はその一部を、余市町のシリバ岬一帯の柱状節理の輝石安山岩に求めている。近代になり、一部手を加えられ、造られた当時とは異なった所があります。</p> <p>この環状列石の北側に隣接する同じ時代の忍路土場遺跡から巨大木柱が発見されており、環状列石と関連する祭祀的な遺跡と考えられ、大量の土器、石器、建材、漆製品、等が出土。</p> <p>小樽・余市の間はストーン・サークルの密集地帯で、ほかに地鎮山のストーン・サークル、余市町西崎山のストーン・サークルがある。地鎮山のストーン・サークルはあきらかに墓の様相を呈している。</p>
<p>4. 周堤墓</p>	
<p>キウス周堤墓群</p>	<p>縄文後期(約3000年前)の集団墓地 千歳市キウス周堤墓 千歳市の中心から東方9km、石狩低地帯を望む馬追丘陵南西麓のゆるやかな斜面に立地。地面を丸く掘り、掘った土を周囲に土手状に積み上げ、その内側が墓地になっており、周囲に堤があることから「周堤墓」と呼ばれている。キウス周堤墓群7基の墓のうち、最大のもは直径が75mにも達します。土手の上から堅穴の床までの深さは5.4m、最も小さな墓の直径は20mです。現在、キウス周堤墓群とその周辺には24基の墓が見つかっている。</p>
<p>5. ウッドサークル 環状木柱列</p>	
<p>石川県チカモリ遺跡</p> <p>石川県 真脇遺跡</p>	<p>金沢市西南部にある縄文時代後・晩期の集落遺跡 環状木柱列(ウッドサークル)</p> <p>直径約80cmほどのクリの木を縦に半分に割った巨大な木柱を直径約7mの環状に立て並べた環状木柱列が重複して発見され、縄文人の木工技術の高さを示すと共に、その性格を巡って注目を集めた。環状木柱列は柱の根元が残るだけで上部の構造は推測するしかなく儀礼の場や特殊な建物などいろいろな考えが出されているが、今のところはっきりとしない。</p> <p>直径30～85センチメートルの巨木が総計347本も発見され、それら木柱の多くは縦に半分に割られ、断面がカマボコ形になっているものやU字形に加工されている。これら木柱のうち直径50センチ以上の23本の巨大な木柱は、集落の中央広場付近に8～10本が組みになって、直径6～8メートルの円形に規則正しく並べて立てられ、環状木柱列が重複して出土。これら、木柱根の出土が縄文時代の遺跡の中で極めて多く巨木文化の存在が考えられ、祭祀施設と想定されている。</p> <p>縄文時代の前期初頭(約6000年前)から晩期終末(約2300年前)まで、約4000年の間繁栄を続けた長期定住遺跡。能登半島の先端から少し内海に入った入江の奥にあって、採集・漁撈の生活を営む集落で、標高4～12mの低地に位置する湿地遺跡であったため、普通は腐って残りにくい動植物で作られた遺物が大量に保存されていた。特に前期末から中期初頭(約5000年前)の層から大量のイルカの骨が出土し、その数の多さから真脇の縄文人はイルカ漁を行っていたと考えられている。</p> <p>また中期中葉(約4500年前)の層からは板敷き土坑墓が4基見つかると、晩期(約2800年前)の土層からは巨大なクリの木を半割りし、円形に立てて並べた「環状木柱列」が見つかった。</p> <p>木柱列はクリ材の半円柱10本で直径7.4メートルの環状に取り囲み、各々の柱を半分に割り、丸い方を円の内側に向けている。その太さは直径80～96センチもある。小さな環状もあり、環状木柱列は何度も立て替えられたと考えられる。</p>

注)太字で記した遺跡が、訪ねたことのある遺跡通常字の遺跡は資料・インターネットで引っ張り出した遺跡です

3. 円環遺構を有する縄文遺跡【1】 縄文の心を映す円環遺構

みなさんには どのように 映るでしょうか……

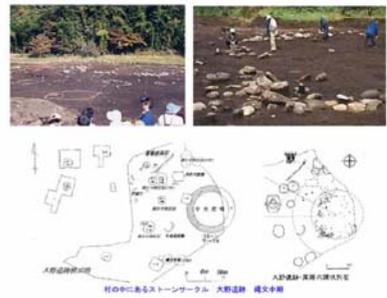
● 馬蹄形盛土と環状集落



垣の島遺跡 馬蹄型盛土



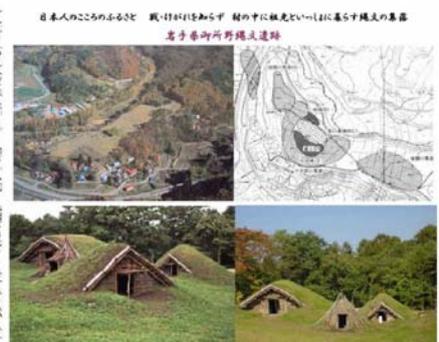
縄文の環状集落梅ノ木遺跡



集落内環状列石大野遺跡

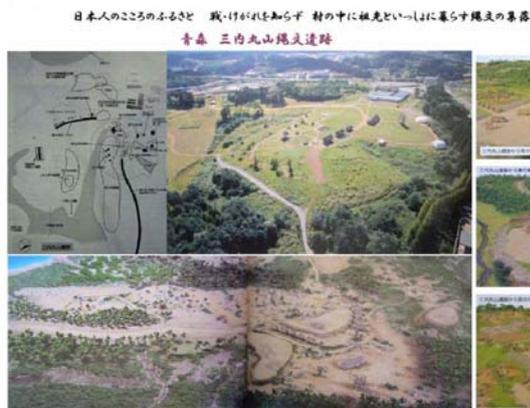


配石遺構の1例 径2mほどの規模で環状の緑石をめぐらし、内側にも石が置かれています。ほかにも中央に大きな石、平たい石を置くものが見られます。



御所野遺跡 環状集落・配石遺構・馬蹄型盛土遺構

● ストーン サークル



三内丸山遺跡墓の道



伊勢堂岱遺跡

鹿嶋町 米代川河岸より



秋田 伊勢堂岱遺跡 C 環状列石と A 環状列石

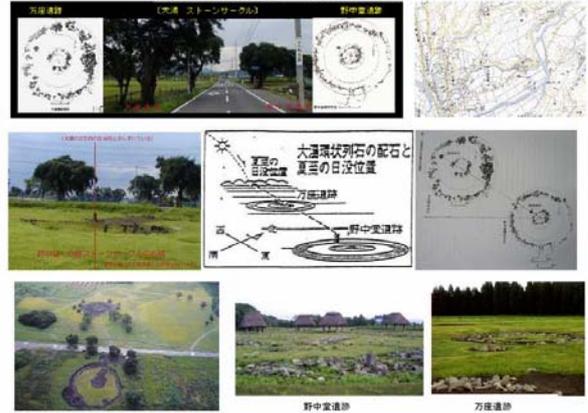
縄文の代表環状列石 小牧野遺跡 青森市



ストーンサークルに近接する墓より、新たに土坑群・約竈穴・墓穴住居跡が見つかり、墓域の幅としての全貌があらわになりつつある

青森 小牧野遺跡

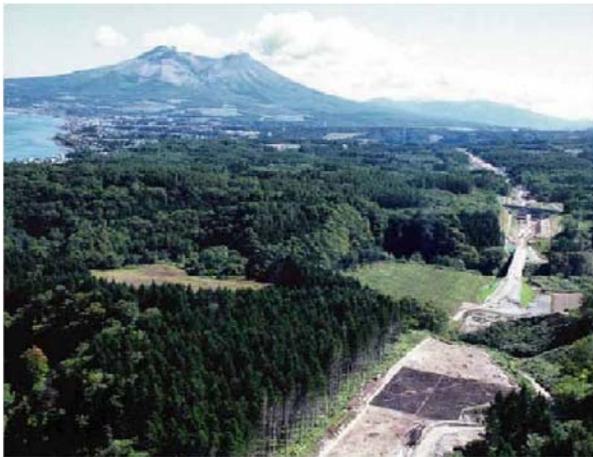
秋田県大湯環状列石 万座遺跡と野中堂遺跡 2000.8.4



秋田 大湯環状列石



北海道 小樽市 忍路海岸 環状列石群



北海道の縄文環状列石

鷺ノ木 ストーンサークル 森町鷺ノ木5遺跡



北海道 森 鷺ノ木5環状列石

● 北海道 千歳の周堤墓群



北海道 千歳市 キウス周堤墓群

● 環状貝塚



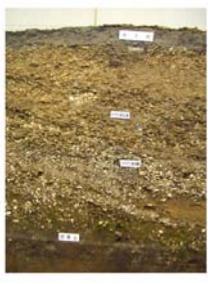
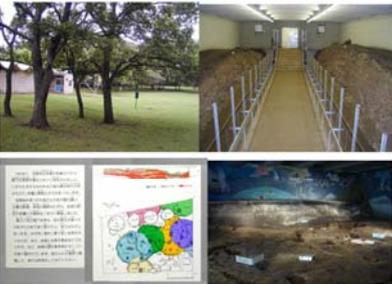
日本最大の大型貝塚 加曾利貝塚の全景 縄文中期～後期 千葉市若葉区加曾利



加曾利 北貝塚



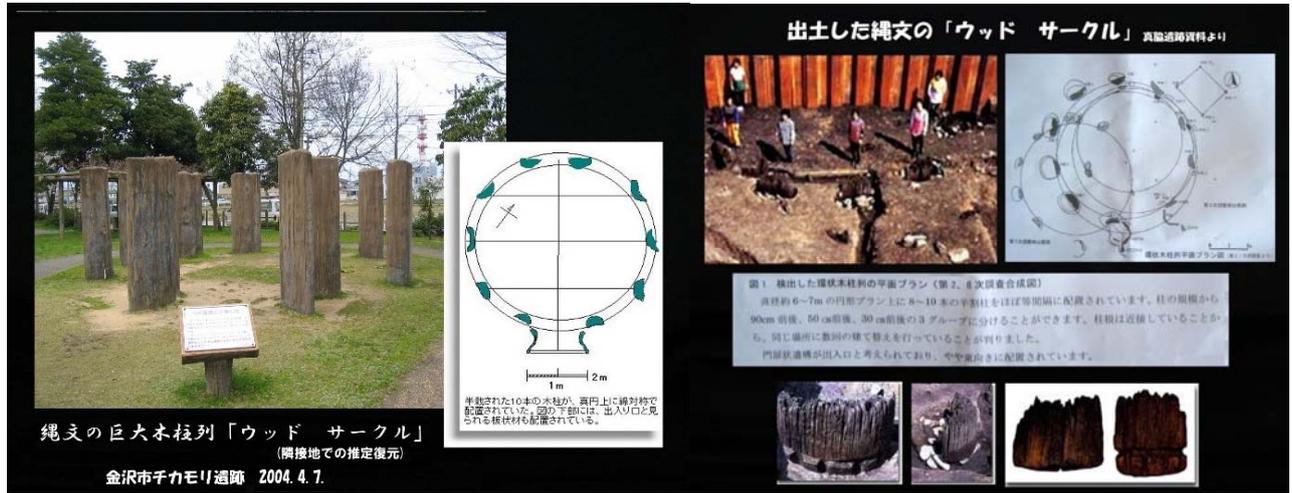
加曾利 南貝塚



千葉 加曾利大型貝塚

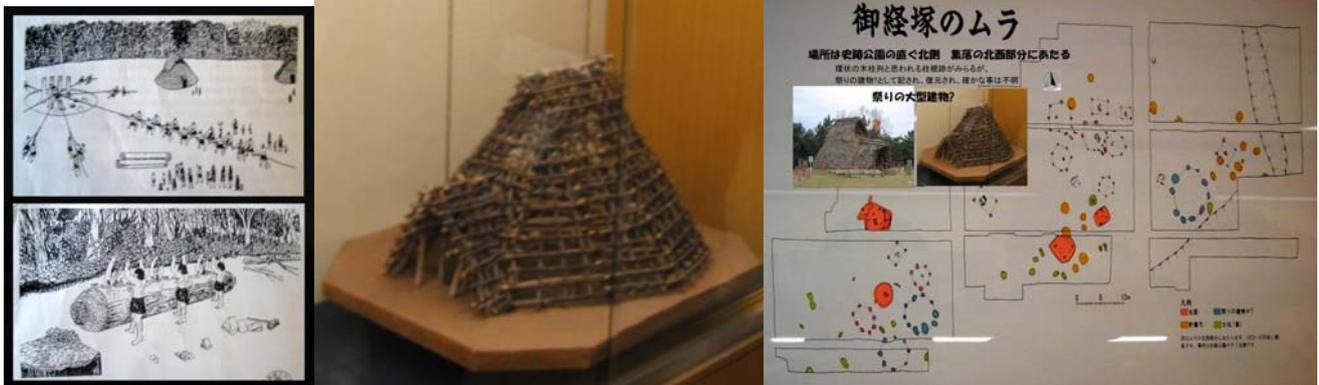
● 雪深い北陸に出現した縄文のウッドサークル





金沢市チカモリ遺跡

石川県能登 真脇遺跡



野々市町 御経塚遺跡でも ウッドサークルと同じ木列が発見 大型樹居かも???
でも 住居だと内部に何も見つからないのが 不自然……

4. 円環遺構を有する縄文遺跡 【2】

4.1. 縄文中期 出現期のストーンサークル 集落内環状列石

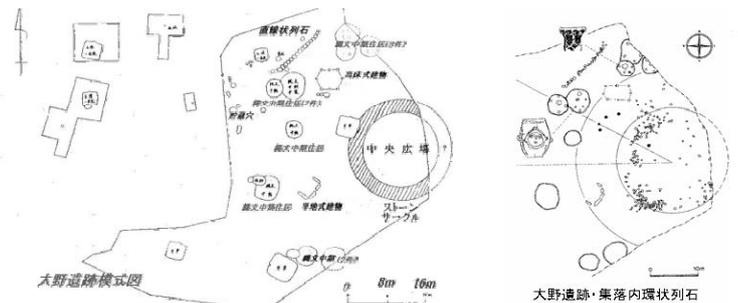
- 大野遺跡（長野県大桑村）の環状配石遺構（縄文中期 4千数百年前）

http://www.interq.or.jp/www1/chungush/kiso/iseki.files/iseki_1.htm より

大桑村長野の大野遺跡は、縄文時代中期後葉（約4千年前）の環状配石遺構（ストーンサークル）で、竪穴式住居跡のほか、直径20mほどの環状配石遺構が、ほぼ完全な形で発見された。ストーンサークルは、祭祀の場や墓地などと考えられている。日本でこれまで発見されたものでは、最も古い。



また、同心円状に存在する住居跡と一緒に見つかる例は少なく貴重な例。また、遺跡の北側には直線状列石が見つかり、集落を区画するような形になっていますが何を意味するかわからない。



ストーンサークルを中央広場として、その外側に住居跡、高床式、地面に直接建った高床倉庫、平地式倉庫、その外側に住居跡が点々とある。環状列石を中心に同心円として真ん中には広場、環状列石、建物さらにその外側に竪穴の住居跡がまわるとい同心円。

村の中にあるストーンサークル大野遺跡 縄文中期

ストーンサークルの内は祭祀、お祭りの中央広場でそれを囲むように石が配され、石の下に、お墓があり、墓石として石を置き、結果としてまるく輪になった。中央広場は縄文時代当時においては、非常に神聖な場所であり人が住む住居跡のある俗世間、中央の聖なる場所と俗世間を区画する意図がある。

● 三内丸山遺跡 縄文中期の墓の道 三内丸山遺跡のストーンサークル群



4.2. 時代と共に進化する縄文のストーン サークル

● 進化する縄文のストーン サークル石の数・石組みの複雑化・大規模な土木工事



左上 三内丸山遺跡中期中葉 4500 年前

右上 大湯のストーンサークル後期 4000 年～3500 年前

左下 北海道鷺ノ木遺跡 後期前半 4000 年前

右下 秋田伊勢堂岱遺跡

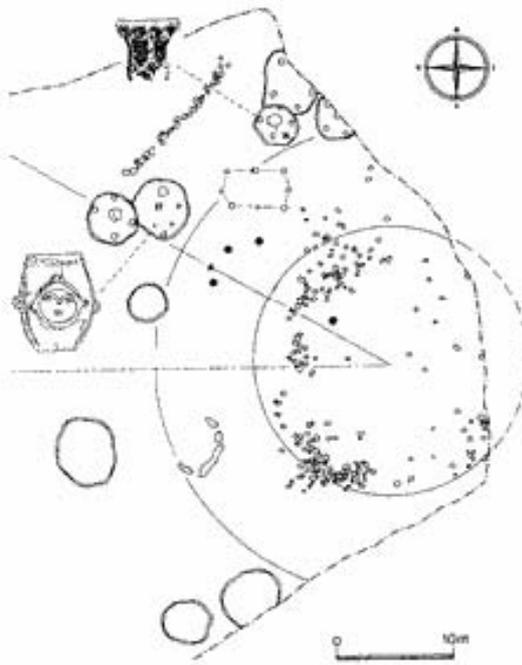
永遠の未完成 進化するストーンサークル

三内丸山縄文の会「縄文ファイル」より

● 集落内から 大規模な集落外ストーンサークルへ



大湯遺跡・万座環状列石
縄文後期 4000年～3500年前



大野遺跡・集落内環状列石
← 縄文中期 後葉 4000年前



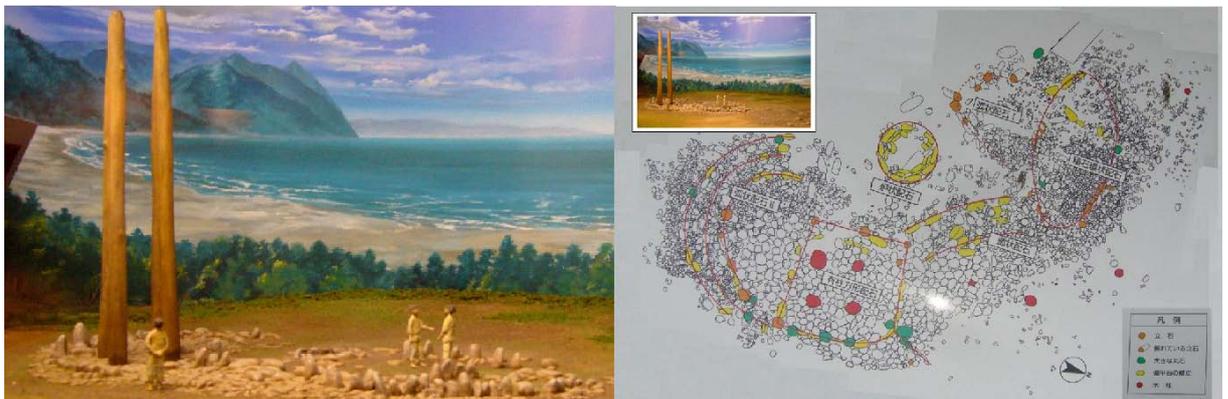
西田遺跡・環状集落
← 縄文中期中葉 4500年前

5. まとめ 縄文のストーンサークルとは・・・

(根拠はありませんが Mutsu Nakanishi の私見)

環状集落・ストーンサークル・ウッドサークル・周堤墓など縄文の円環遺構は「縄文人の絆・心の象徴」
 そんな中に建つ立石や木柱がある。 これらを通して、縄文人は自然や祖先と対話し、永遠の命・再生を願
 い、共に生きることを確かめ合ったのではないか・・・
 ストーンサークルは共同墓地の性格が強く同じ意識集団の祭祀の場でもあることが、明らかになりつつある。

「柱」に「異界をつなぐ」意味を見出し、「サークル」は「大地・自然・集落」か・・・
 「円」と「柱」は それこそ森の民 縄文人が毎日みなれた森、畏敬する自然か
 そして、それらを通して亡くなった祖先と対話し、永遠と再生を願う。



柱・立石」「ストーンサークル」が揃った縄文中期から続く翡翠の加工工房集落
糸魚川 寺地縄文集落遺跡

ストーンサークルの東日本・ウッドサークルの北陸・御柱の諏訪の文化圏。

それらが重なる縄文人交流の拠点姫川に近い海を臨む糸魚川市青海の高台に「柱・立石」「ストーンサークル」が揃った縄文中期から続く翡翠の加工工房集落がある。

そして、そのジオラマが新潟県長岡市の県立歴史博物館にあり、当時の縄文の村・円環遺構を再現している。

「縄文人はすばらしい景色が広がる高台に住んでいた」が私の縄文遺跡を巡った印象。

自然の大パノラマを前に思いをめぐらすとき そんな感じがする。

「サークルと柱」は再生・命の絆 それを天空・自然に求める縄文の象徴ではないだろうか・・・

東日本には数々の縄文の円環遺構が見つかった。

しかし、西日本・関西では まだ ストーンサークルはまだ発見されていない

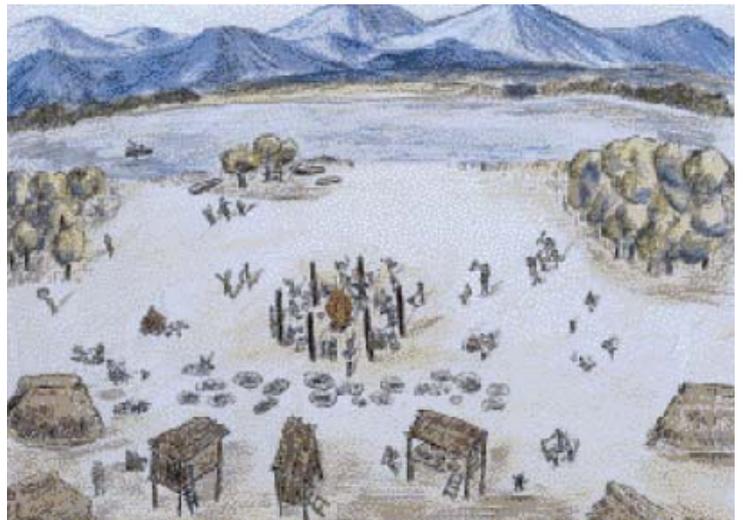
関西にもストーンサークルはあるのだろうか・・・

北陸のウッドサークル 木柱列が滋賀県近江の能登川にもあるという。(能登川 正楽寺遺跡 縄文後期)

西日本の縄文人は「縄文人の絆・心の象徴」の象徴を何に求め、どこで どんな祭りをしたのだろうか・・・
縄文の自然の中ではぐくまれ、縄文から延々と受け継がれてきた神奈備山と磐座が日本各地に広く存在する。
この流れが 西日本の縄文の痕跡かもしれないなあ・・・とふっと思う。

東北など東日本に残るストーンサークルをはじめとする「円環」遺構とともに神奈備山・御柱や自然信仰
そして各地に残る磐座は時代を超えて受け継がれ、
数々の伝承が伝えられてきた。

これからも、「ふっと われに返ったとき」 これらが日本人の心の象徴として受け継がれていくのかも知れない。



能登川 正楽寺遺跡 縄文後期 想像図

www.town.notogawa.shiga.jp/acic/tenkomori/fudo_iseki1.pdf より

2007. 6. 6. Mutsu Nakanishi

参考資料

1. M.Nakanishi 縄文のストーンサークル等訪問 Country Walk

- 縄文人の心を映すストーンサークル東北 秋田・青森のストーンサークル

<http://www.ne.jp/asahi/mutsuo/nakanishi/jstlaa07.pdf>

- 日本最大の大型縄文貝塚加曾利貝塚遺跡探訪加曾利縄文貝塚公園

<http://www.ne.jp/asahi/mutsuo/nakanishi/kasori.pdf>

- 北陸・能登に点在する縄文のウッドサークル探訪金沢チカモリ・能都真脇・小矢部桜町遺跡

<http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/iron/4iron09.pdf>

- 早春と冬が入り混じる「北の大地」を風来坊北の縄文を訪ねて

<http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/pdfwalk/4walk05.pdf>

- 日本人の心の故郷 縄文の集落がそっくりそのまま見つかった

茅ヶ岳山麓の北杜市梅ノ木縄文集落遺跡を訪ねる

<http://mutsu-nakanishi2.web.infoseek.co.jp/iron2/hskzu01.pdf>

2. 発掘された日本列島 2005 & 2006 ほか

3. 三内丸山発信の会「縄文ファイル」

4. 三内丸山遺跡から縄文列島へ「縄文文化の扉を開く」

6. 三内丸山遺跡と北の縄文世界

ほか

縄文の心を映すストーンサークル

木柱列と配石遺構の両方が一緒に見つかった糸魚川市寺地遺跡

糸魚川市 寺地遺跡 [1] 木柱列と配石遺構が一緒に発見された縄文遺跡 3000年前 縄文晩期

東西約150メートル、南北約650メートルの範囲内にある縄文時代の中期から晩期の遺跡で、ヒスイの玉造をしたとされる「硬玉工房跡」(縄文中期)や髹漆の形跡がうかがえる縄文晩期配石遺構や巨大木柱が検出され、現在は史跡遺跡公園として整備されている。



配石遺構出土品

縄文中期翡翠工房竪穴住居群と出土翡翠原石

御物石器も出土



国指定史跡の「寺地遺跡」は田海川河口近くの西岸に位置し、東西約150メートル、南北約650メートルの範囲内にある縄文時代の中期から晩期の遺跡で、ヒスイの玉造をしたとされる「硬玉工房跡」(縄文中期)や祭祀の形跡がうかがえる縄文晩期配石遺構や巨木柱が検出され、現在は史跡遺跡公園として整備されている。

遺跡公園に接して北側に道路、南側に北陸本線が走り、遺跡の一部がそれぞれにかかっている。

縄文中期のヒスイの玉造工房の発見された遺跡の西側部分からは硬玉製玉類や蛇紋岩製石斧の生産を実施した工房である竪穴住居7基が検出された。遺物は中期土器のほか、硬玉製玉類(大珠・丸玉)、蛇紋岩製打製及び磨製石斧、板状石器、釣針状石器、鼓石、石鏃、石槍、石鏃、蠟石製大珠、砥石、研磨砂笄が出土した。なお、第1号住居跡は、完掘された硬玉工房跡としては、わが国最初のものである。

また、道路の北東角から北西道路そして南側に掛けて縄文晩期の配石遺構、組石基、木柱群等が検出された。配石遺構はいくつかの小単位が集合し、全体として長径16メートル、短径10メートルの楕円形を呈していた。

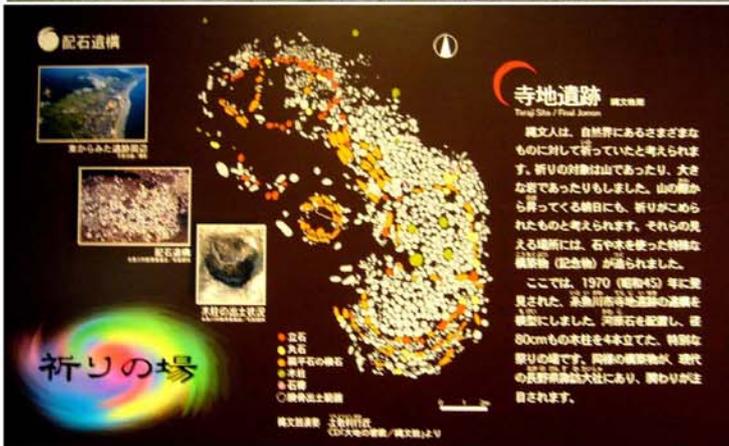
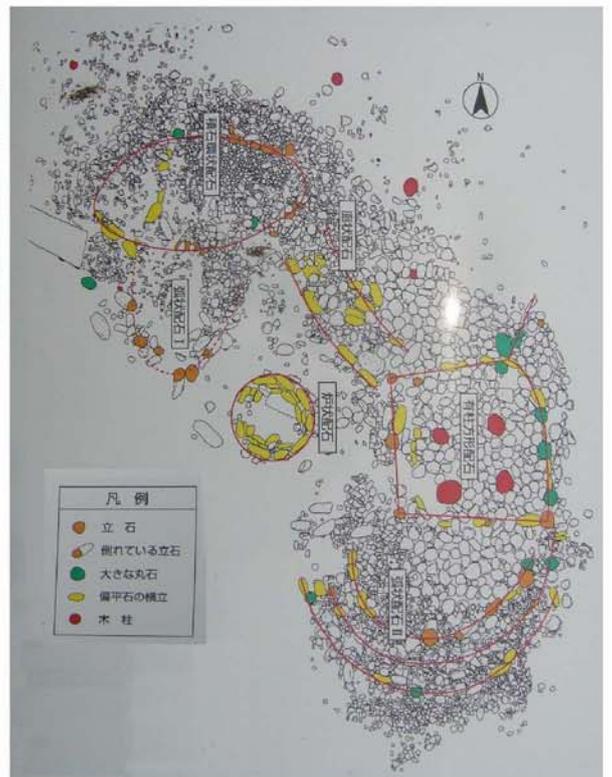
中央に炉状配石が存在し、北側に楕円形積石配石と弧状配石があり、南側に方形配石と弧状配石があり、相互を高状の敷石が結ぶという対照的構成である。また北側には大形有孔石が、南側には大形石棒が多く出土して注目された。

中央の炉状配石は径約2メートル、河原石を二重に配し焼土が充満し、内部北端に10体分の焼人骨埋納ビットがうがたれ、南の方形配石は一辺約3.6メートルで扁平石を横立して垣状に内外を区切り、四隅に石棒と立石を配し、中央に直径60センチの根元にくくりのある木柱4本を

90センチ間隔で対照的に直立させていた。

また、本配石遺構の北側一帯からは、大小多数の木柱及び組石基が検出された。

遺物は地域的特色の濃い大洞C1~A式比定土器のほか、土偶、土版、スタンプ形土製品、土製円板、球体土製品、耳栓、打製石斧、磨製石斧、御物石器、石剣、石鏃、石鏃、石鏃、石棒、石鏃、筋砥石、平砥石、石皿、凹石、朱漆塗柳、藍胎漆器、有孔円板状木器、箸状品、丸材、割材、クルミ、竹、山桜皮、人骨、獣骨、魚骨、牙、アスファルト塊、朱塊、硬玉製勾玉、丸玉、小玉、垂玉、硬玉原石、削片など。



縄文の社会と文化 概 説

縄文文化の超自然観 -死と再生のシンボリズム- 明治大学蛭川研究室公開資料 世界の人類学より 整理転記
http://www.kisc.meiji.ac.jp/~hirukawa/anthropology/area/ne_asia/Jomon/index.htm

人口が急増し、精神文化の遺物を多数残した中期以降の東日本の文化に焦点を当てて 縄文の社会・文化がわかりやすく 全体を概説されていたので、その資料を整理・転記して、縄文の精神生活を考えるのバックホーン解説としました。

(自分の理解したところで、抜粋・要約作ろうとしましたが、ほぼ整理・転記となってしまいました。)

詳細 正確には上記インターネットサイトより 原文をごらんください。)

階層を発達させつつあった社会

- 縄文人は文字を残さなかった。弥生時代、日本列島に大規模な文化の流入があったため、縄文人が弥生文化以降の日本人の直接の祖先かもはっきりしない。
その言語人類学的系統は不明だが、前半は古アジア諸語、後半はオーストロネシア語族などとの関係が指摘されている。
- 縄文人は狩猟・採集をベースにしながらも、高度な漁撈と根菜・雑穀の単純農耕を行い、定住性の高い社会をつくっていた。

(写真：長野県与助尾根遺跡復元集落/中期/茅野市尖石縄文考古館)

- 集落の構造や遺体の埋葬方法からみて、明確な社会的階層は存在しなかったと考えられる。埋葬人骨の抜歯パターンによる分析や子どもに対する副葬品の分析を合わせて考えると、縄文社会は基本的には母系的な部族社会であったが、晩期北日本の亀ヶ岡文化では、北米北西海岸にみられるような、高度な漁撈にささえられた、より父系的な首長制社会が形成されていったらしい。
また前期～後期の中部・関東で発達する環状集落には2分節、4分節の構造がみられるので、単系出自・双分制、さらには重系出自・四分制の親族組織が存在した可能性がある。(縄文文化と関係が深いとされるアイヌの社会は重系である。)



政治的指導者と宗教的職能者

- また後期以降には、埋葬法は一般人と同じでも、一部の人物が装身具とともに葬られていることがあり、政治的な首長ないし宗教的職能者であった可能性が高い。
腰飾りは男性に多く、貝輪は女性に多く、ヒスイなどの石の玉、耳飾りは男女双方が身につけている。このことから、あるていど男女の政治・宗教的分業が行われていたことがうかがえる。

(写真：ヒスイ製大珠/晩期/山梨県金生遺跡/大泉村歴史民俗資料館)

- 一般に、狩猟・採集社会では男性の脱魂型シャーマンが政治的リーダーでもあり、農耕・牧畜社会になると、男性の祭司的首長と女性の憑霊型シャーマンが分化する。このモデルにしたがえば、まさに縄文時代にこの分化のプロセスが進行したものと考えられる。
- しかし、かりに、もっとも希少であったヒスイの首飾りを政治的首長の象徴と考えると、縄文社会では男女の両方が政治的なリーダーになることができたということになる。さらに、腰飾りを祭司的男性、貝輪をシャーマン的女性の象徴とすると、たとえば福岡県の山鹿貝塚(後期)から出土した、玉と多量の貝輪を同時に身につけていた成人女性は、シャーマンと首長を兼任する存在だったということになる。これは、職能者の分化の一般モデルにはあてはまらない。そして逆に、弥生時代以降の文献にあらわれる、シャーマン的女王との連続性をうかがわせる。

(写真：ヒスイ製首飾りをつけた女性像/茅野市尖石縄文考古館)



土偶と女神信仰

- 土偶は縄文文化を特徴づける呪物である。北部ユーラシアの旧石器時代にみられる、いわゆるヴィーナス像の系譜を受け継いでいる。前期以前は平たい、シンプルな板状土偶が主流だったが、中期以降は多様な形態を持った立体的な土偶がつくられるようになる。

(写真:「縄文のヴィーナス」/長野県棚畑遺跡/中期/茅野市尖石縄文考古館)

- 土偶の用途については諸説あるが、その大多数が女性の姿であることからみて、なんらかの女神崇拝があったと考えられる。

- 土偶の中には、合掌しているような姿勢のもの(写真左:青森県風張遺跡/後期/八戸市博物館)や、仮面をかぶっているような形をしているもの(写真右:長野県中ツ原遺跡/後期/茅野市尖石縄文考古館)がある。これらが、シャーマンなどの宗教的職能者の姿をかたどったものだという可能性もある。もしそうなら、縄文社会の宗教的職能者の大半は女性 だったということになる。



- 後期～晩期の東北地方を中心に出土する、しゃがんだ姿勢の「屈折土偶」は、背中が平らなものがあることからみて、座っているのではなく仰向けになって出産の姿をあらわしている

という解釈もある。いずれにしても土偶が象徴しているのはあきらかに「母としての女」であって、もしこれが宗教的職能者のイメージだとすると、未婚の「姉妹としての女」としての色彩の濃い弥生時代以降の巫女とは微妙に意味がずれることになる。

- 土製の仮面は後期～晩期の東日本に多く出土する。人間の顔と同じぐらいの大きさで、左右に紐を通すための穴があいているものもあるので、じっさいに儀礼や舞踊に使われたらしい。(写真:土面/長野県下原遺跡/中期/東京国立博物館)



- 「仮面土偶」は、長野県中ツ原遺跡、縄文後期の墓地から出土した。人骨は残っていませんでしたが、被葬者の頭部にかぶせたものらしい鉢があわせて出土した

- 骨が残りやすい貝塚からは、じっさいに鉢を被せ葬られた人骨が発見されている。写真は千葉県さら坊貝塚で発見された、縄文時代中期後葉の中年女性の遺骨(千葉市立加曾利貝塚博物館)で、左腕に、おそらくはシャーマンのシンボルである貝輪をはめている。土偶がシャーマンをかたどったものかどうかはともかく、縄文のシャーマニズムにおいて重要な役割を果たしていたであろうことはまちがいない。



「殺された女神」仮説

- 土偶の、妊娠しているという特徴は特異なものである。未来の考古学者がわれわれの文化の遺物を研究しても、裸体の女性を崇拝?していたと考えるかもしれないが、そこで崇拝されているのは性の対象としての女性であって、母としての女性ではない。縄文文化からは、アンデスのモチェ文化のよう

な、性行為を行う男女の像なども見つかっていない。

- 妊婦であるという特徴を重視すれば、土偶は安産・多産の女神だという解釈がもっとも自然だといえる。
- しかし、それだけでは、壊されたり、埋葬されたりしているという奇妙さが説明できない。数千年前の土製品が割れることはむし当たり前なので、意図的に壊されたことを証明することは難しいが、同じ土偶の破片が遠く離れた場所から見つかる。

土偶を X 線で調べると、あらかじめ壊すことを前提にしたような造られかた(分割塊作成法)をしているなどの間接的な証拠が挙げられている。

(写真:土偶の X 線写真と分割塊作成法/山梨県釈迦堂遺跡博物館)



- また、神話学の知見からは、殺され、埋められた女神の身体の各部から各種の栽培植物が発生するという、オーストロネシア文化圏などにみられるハイヌウェレ神話との関係が指摘されている。日本では『古事記』のオホゲツヒメ神話、『日本書紀』のウケモチノカミ神話にハイヌウェレ神話素がみとめられる。

- 縄文人は、土偶を壊し、その身体の一部を埋葬することで、豊穣を祈ったのかもしれない。



(写真：土坑に埋葬された状態で発見された土偶/山梨県釈迦 堂遺跡/釈迦堂遺跡博物館)

- しかし、ユーラシアのヴィーナス像は旧石器時代に多く発見され、土偶も縄文草創期から出現するので、縄文中期以降に粗放 農耕が行われていたとしても、土偶祭祀と農耕を直接結びつけることはできないとして、北方狩猟民の家の守り神と結びつける考えもある。また、土偶だけでなく石棒にも意図的に壊された形跡があり、一般に使い終わった呪物は壊してから破棄するという観念があったのかもしれない。

容器のデザイン



- 中期の勝坂文化圏で出土する人面付深鉢や人面付釣手型土器は、それぞれ、食物の調理と火を灯す用途に使われたものらしい。いずれも妊婦のような形をしており、人面把手付深鉢の中には子を出産しつつある姿が描かれているものもあるので、これらの土器は<容器としての女性>を象徴しているといえる。

(写真左：人面把手付深鉢/中期前半/長野県梨ノ木遺跡/茅野市尖石縄文考古館)

- そのほかにも、岡本太郎(1973: 42)をして「超現代的日本美」と言わしめた縄文土器の様、とくに「火焰土器」(写真中：馬高式深鉢/中期/新潟県馬高遺跡/東京国立博物館)や、「水煙土器」(写真右：曾利式深鉢の「水煙把手」/中期/山梨県釈迦堂遺跡/釈迦堂遺跡博物館)など、中期の深鉢には不思議な隆起線文様が描かれることが多く、シャーマンの意識状態で体験されるサイケデリックなヴィジョンを思わせる。

- たとえば、アマゾンの根菜農耕民シピボの、妊婦をかたどった、顔の付いた壺の表面には、サイケデリック植物であるアヤワスカを摂取したときに見える、不思議な幾何学模様が描き込まれている。縄文土器が同じような意味を持つ可能性もじゅうぶんに考えられる。

他界と交流する技法

- 縄文のシャーマニズムはおそらく脱魂型から憑霊型へ移行していったものと考えられるが、脱魂型の色彩の濃い時代には、太鼓や向精神薬などの積極的な意識変容技術をももっていたはずである。

- 縄文人が使用していた楽器の証拠あまり多くないが、おもに中期に 出土する土鈴、土笛・石笛がある。ほかに、晩期の東北で出土する篋形木製品は弦楽器の一種だったと考えられている。



- 特異なものとしてひときわ目を引くのが有孔罌付土器である。ややこしい名前だが、ようするに、口の部分にほぼ等間隔で小さな穴が開けられており、見るからに太鼓のようである

(写真左：山梨県釈迦堂遺跡/中期/釈迦堂遺跡博物館)

- 1990 年には土取利行(1990, 1999)により「縄文鼓」の実験的な復元と演奏が行われた。

(写真中：鹿皮を張って太鼓型に復元した有孔罌付土器 /茅野市尖石縄文考古館)

- いっぽう、有孔罌付土器の中からヤマブドウの種子が発見されたことや、注口部を持つものがあることから、これを一種の酒樽とする説もある(武藤, 1970)。この場合、口につけられた穴は、醸造のさいのガス抜きないし装飾用だと解釈される。(写真右：羽根飾りをつけて復元された有孔罌付土器/富士見町井戸尻考古館)

- しかし、太鼓にしても酒にしても、意識の状態を変容させ、霊的な世界とコンタクトするために使われたということには変わりはない。またどちらも日本の土着信仰＝神道の儀礼には欠かすことのできなかつたものであり、弥生以降の文化との連続性を感じさせる。
- 酒以外に、日本列島の自然条件で、意識状態を変容させる向精神薬として使用された可能性が考えられるのは、麻、ベニテングタケ、シビレタケなどのシロシビン系キノコ、そしてヒキガエルである。
- 中期の勝坂文化圏から出土する土器、とくに有孔罎付土器には蛇やデフォルメされた人物像が描かれることが多いが、これをカエル（の精霊？）と解釈し、古代中国のヒキガエル崇拝と結びつける考えもある（井戸尻考古館・田枝, 1988）。（写真）縄文人はイヌやイノシシなど身近な動物たちを写実的にかたどった土製品を多数残しているが、その伝統の中で奇妙にデフォルメされた動物像は異彩を放っている。それは、あたかも身近な精霊たちを「写実的に」かたどったものであるかのようだ。
- アサ（大麻）は縄文前期にはすでに縄や布として利用されていた。ただしそれが繊維材料ではなく向精神薬として用いられたかどうかはわからない。『魏志倭人伝』には弥生時代の西日本で酒が好まれる一方、麻の栽培が行われていたことが書かれているが、それが向精神薬として用いられていたという記述はない。しかしその後も大麻は神道の伝統の中では神聖な植物でありつづけた。



（写真：福井県鳥浜遺跡/前期/福井県立若狭民俗資料館）

- 東北～北海道の縄文後期の遺跡からは、しばしば環状列石にともなってキノコ形の土製品が出土する。キノコが神聖な植物とみなされていた可能性があるが、これが古代メソアメリカにあったような、向精神性のキノコ崇拝なのかどうかはわからない。傘が凸状のもの、凹状のもの、赤く着色されているものなど、いろいろな形態のものがあるが、どれもベニテングタケやシビレタケ類のキノコには似ていない。



（写真：青森県観音林遺跡/後期/五所川原市歴史民俗資料館）

再生への信仰？

- 縄文時代の葬送法は土葬で、楕円形の土坑墓に手足を折り畳んで葬る屈葬が一般的だった。これは、伸展葬が一般的となった弥生時代以降とは対照的である。岩を胸に抱かせて葬る抱石葬がみられることもあるので、正常死か異常死かを問わず、縄文人は死者がよくみがえってくるのを恐れていたという解釈がある。逆に、屈葬は子宮の中の胎児の姿であり、再生への願望をあらわしていた、という解釈もなりたつ。あるいは、たんに土を掘る労力を節約したのだという解釈もある。



（写真：屈葬された男性/千葉県加曾利貝塚/後期/千葉市立加曾利貝塚博物館）

- 中期～後期の中部・関東に発達する環状集落は、中心に墓地、周縁に居住地という構造を持っている。死者を穢れたものとして周縁化するよりはむしろ、積極的な祖先崇拝のような観念があったことをうかがわせる。

- 中期以降には遺体を甕棺に入れて埋葬することもあったが、そのほとんどが胎児か乳児で（菊池, 1983）、流産・死産の子を特別に葬ったと推測される。これにも、死んだ子を子宮＝甕棺に戻して再生を願うという意味があったのかもしれない。



- 縄文後期の関東でよくみられる柄鏡形住居（敷石住居）の入り口には、甕棺らしい土器が埋められていることが多く（埋甕）、胎盤、あるいは流産・死産児の遺体を収めたものだと考えられている。

（写真：東京都新山遺跡/中期/東久留米市教育委員会）

- これを、死産児の遺骨を、住居の近辺のトイレや玄関など、女性がよくまたぐ場所に埋葬して再生を願うという、近年まで残っていた風習と結びつける考えもある。

- 長野県唐渡宮遺跡から出土した埋甕（写真右：中期/富士見町井戸尻考古館）には、性器を広げた女性の姿が描かれている。そこから下に伸びる線は、赤ん坊にも見えるし、子どもの魂が立ち昇って子宮に帰っていくようにも見える。



- 埋甕の中には、上下を逆にして底部に穴を開けたものも多い（逆位底部穿孔埋甕）。子どもの靈魂が抜けていけるようにとの配慮だろうか。

（写真右：山梨県釈迦堂遺跡/中期後葉/釈迦堂遺跡博物館）



配石の世界観

- 中期～後期の中部・関東では、男性器をかたどった石棒が、ふつう住居の中、とくに入口-炉端-奥壁に立てられるようになる。石棒は土偶と同様意図的に壊されたり、意図的に焼かれたりしているものが多く、なんらかの儀礼的意味を持っていたと考えられる。
- 土偶とは違い、男根崇拜は現在の日本の民俗社会にもみられるもので、ふつう、女性が石や木の男根に触れることで、子宝に恵まれると信じられている。縄文の石棒にも、同じような、生殖力への崇拜という意味があったと考えることができる。
- 柄鏡形住居の入口では、石棒と埋甕が対になって出土することもある。埋甕＋石棒（あるいは柄鏡形住居全体＋石棒）＝女性器＋男性器＝妊娠・出産（再生）という象徴的な構造が考えられる。棒状のものをなんでも男性器、穴や容器をなんでも女性器とみなす象徴論は、やりすぎるときりがないが、少なくとも石棒の一部が確実に男性器をかたどっていることは間違いない。



（写真：新潟県籠峰遺跡/後期～晩期/中郷村教育委員会）

- 石棒は晩期の東北を中心に、男性器の写実的表現を離れ、石剣、石刀などのより抽象的な形態に発展していく。また中部・北陸地方では、石棒は「石冠」に発展する。ひとつの石に男性器のような突起と女性器のような溝の両方が彫り込まれているものが多く、ここにも女／男とい



う象徴的二元論をみてとることができる。

（写真：石剣/山梨県金生遺跡/晩期/大泉村歴史民俗資料館）

- 配石は北海道から九州まで、縄文時代全体をとおしてつくられた。祭祀の場所だったと考えられているが、同時に墓地だったことが確認されているものも多い。
- 住居の中に置かれた小型の石棒とは別に、縄文後期には大型の石棒が配石の中心など、屋外に立てられるようになる。配石墓の中央に建てられた石棒には、抱石葬同様、死者の霊を鎮める意味があったのかもしれないし、逆に、死者の再生を願うシンボルとしての意味があったとも考えられる。（写真：復元配石/山梨県金生遺跡/晩期）
- 後期の東北地方を中心につくられた環状列石（ストーンサークル）は墓石だったらしい。また後期～晩期の北海道では環状土籬（周提墓）が、北陸では、環状木柱列（ウッドサークル）がつけられた。



- 環状集落などの構造もあわせて考えると、縄文人の世界観は、北/南、山/海のような直線的な二元論ではなく、円環的で同心円状だったといえる。しかし、写真右の野中堂環状列石のように、おおよそ東西南北の四方向に大きな石が置かれているのをみると、縄文人は東西南北という方位をあるていど意識していたことがうかがえる。環状集落にも四つに分節されているものがあること、土器の模様は4を単位とするものもとても多いことも視野に入れると、縄文文化に四分制的世界観が存在したことも想定できる。



（写真右：秋田県大湯遺跡野中堂環状列石/後期/鹿角市教育委員会）

三内丸山縄文発信の会
第19回縄文塾 (東京支部第10回例会)
講演

第19回縄文塾を、2009年4月14日(金)、東京・恵比寿の株ジャイアル東日本企画本社13F・A会議室で開催した。講師は、文化庁の岡村道雄氏と青森県三内丸山遺跡対策室の岡田康博氏。今号は、岡村氏の講演の記録。

●墓は送る側のために

これまでの各時代に、死者がどう扱われていたのかを明らかにしていけないか、現代における死者や、お墓に対する考え方をなどを紐解いていきたいと思います。

死ぬ人たちは、どんな気持ちで死んでいったのか、あるいは死んだ人たちが、どういふふうにお墓に扱われていたのかを明らかにしていけないか、考古学は、遺跡に残された事実だけを表面的に見ていない学問ということになる。

縄文人の平均寿命は約30年だから、やっとな大人になった。そろそろ結婚して家庭も作るのかなというときに死んでしまふ。現代で死んだ人も多かったらしい。私たちが現代人のような成人病にならないうちに死んでしまう。

縄文人は堅く住居で、みんな人間と見られて死んだのだろうか。死んだ人を見ることは、死んだ後どうなるかはわからない。そう考えると、墓はなぜ作るのか。生前に墓を作っておけばいいが、死んだ人にとっては、自分がどんな墓に入るかわからないのだから、送る人たちのために、墓を作る意味があるのでは、ないかと思ふ。

●墓を作る意味

旧石器時代の人びとは、獣を追いかけて遊動生活をしてきた。だから人が死んだら、その場所でお墓を作り、また別の場所へ移してしまふ。数日ぐらいいかじりしにいないかと思ふ。

「北の墓」が物語る縄文の世界
Jomon World Seen Through the "North Mound" at Sannai-Maruyama

やがて縄文時代になると、定住生活をするようになる。死者が出てくるから、村の一定の場所を墓に割かなければならない。

最近、村の構造がわかるようになってくる。村の真ん中に墓地を設け、同時に中央広場にもなっていたことがわかってきた。村の中心を墓地にしたのである。そこには祖先がいるし、自分たちが愛した肉が入っている。こういう人たちに守られて、一体になって生活しているという意味で、いばげん大事なる真ん中に墓を作る。

これが縄文時代の最初のやり方で、縄文時代の半ばまで続く。

墓を大事にしているだけの意味ではなく、筑波大学の西田正規先生によると、「ここは私たちの祖先伝来の土地なので、他の人たちは入ってくるな、つまり墓を真ん中に据えてここを占拠することによって他者を排除するという意味もあるのだという。なるほどそれはそうかもしれないなと思った。ただしこの時代の土地に対しての執着は、弥生時代以降の感覚とは違うので、今後どこまで証明できるかというのがポイントだ。

もうひとつ、墓を作ることは、受け継ぐ人たちにわたる意味がある。死者の持っている地位、財産、名譽などを継承する人にとって意味がある。

古墳時代の前方後円墳をひとつ例に挙げよう。古墳は、村の人たちをいつでも見下ろす場所に作ると思われていた。しかし、見下ろす場所ではなく、いつでも見上げられる場所なのだ。逆の発想である。「自分は代々この地域の王様だ。俺はその系統を受けた。村の正当なリーダーなんだぞ」ということを、墓を見させることによって引き継ぐという意味があるといわれている。

縄文時代の墓の中でも、リーダーの墓については、そういう意味合いがあるのかもしれない。

●墓地の一生を考える

どこの遺跡でも、墓があったら、ここはどいうやって死者が運ばれてきて、どうやって埋められて、どういふ葬式をやった、といふひとつの墓地の一生みたいなものを考えていかなければならないと思う。葬式の後には、継続的に墓前祭祀が繰り返されたりはしない。痕跡は、墓の中や墓周辺に残されているはずだ。しかし墓の中には、骨しか残っていない、あるいは骨も残っていないというケースがあるので、骨が残っていると、骨がいきなり普通なられてしまったような誤解を私たちが持つてしまう。裸で入れられたのだろうか。服を着て入れられたのだろうか。どんな服装だったのだろうか。そういうことがもすごく気になる。実は全然わからない。

少しだけ証拠があるのは、北海道千歳市の美々(4)貝塚で、樹皮舟の形に組んで、その中に遺体を入れた墓が見つかった。どうも白樺の樹皮を舟のように組み立て、舟に乗せての舟にいせようとしていたらしい。弥生や古墳時代の葬送儀礼に舟がよく出てくる。これが舟ならば、そういうことと結びつかもされない。縄文時代では、これがたつた1例だから断定はできない。

それから縄文時代中期の千葉市内野第1遺跡で、黒地の漆に赤の漆を塗った布に包まれた2、3歳ぐらいの子どもの遺体が出ていた。たぶん服もちゃんと着て、人によっては死に装束がつけられて、そして何かにくるまれたり、容器に入れられて葬られたらうというところまでは何とかわかるようになった。部分ではなかなか難しい。

そういうことで死者の取り扱い方みたいなことを、もっと考えていきたい。死のフロンティアとか、死者をどう扱っているかというは割合民俗学でよく調べられているので、そんなことも勉強していかなければいけないなと思ふ。

●墓への埋葬法は様々

縄文人はどんな墓を作ったのか。基本的には墓穴を掘って埋めているだけ。これは土坑墓と呼んでいる。それから墓穴もなく、浅い窪地や川の縁、あるいは貝塚とか盛土の中に遺体を置いていろいろな例が結構ある。例えば川辺とか、遊覧船登川町の正楽寺遺跡で、川縁の崖の上にちゃんと耳飾りをつけた遺体が置かれていたのが出てきた。それから貝塚の中にはときどきほとんど墓穴を掘っていない状態で骨が出てくるケースがある。浅い窪地とか、骨が出てきて、はじめてこれが墓だと確認される。墓を掘らない

で遺体をそっと置いていくようなケースも結構あったのではないと思う。そういうケースは遺体が出てこないで絶対わからない。貝塚では貝殻に守られて遺体がよく残るから、そこに埋葬されたことがわかる。

貝塚と同じ性質を持った三内丸山遺跡の盛土遺構も、ときどき何かお供えしたようなもの、あるいは耳飾りが対になって出てきたり、どうもそこに遺体があったらしい場面に出合うことがあるから、盛土の中にもたぶんお墓があったと思う。

南九州では、縄文時代前期ぐらいまでは墓があったり、貝塚の中に墓が見つかったりするが、南九州から沖縄にかけては、普通の集落の中から墓は見つからない。だから全然墓を作っていないとか、風葬とかか、木のうたとかで埋葬しているケースも出ておかなければいけないと思う。南九州はあれだけ発掘されているのに墓穴群は見つからないのは興味深いところだ。

こういう見方をしてみて、果たして、墓に埋葬されなかった人がいたかどうか、ここが問題だ。三内丸山の北の谷から出てきたり、頸骨が出てきたり、部分の骨が出てきているが、私は彼らが墓なしの階層だったことを、考えたくはない。考えたくないだけで、まだ証明はされていないが、これからの発掘調査でしだいに明らかになっていくだろう。(要約・抜粋)

森本哲郎氏 縄文塾 講演対話より

三内丸山縄文発信の会
第22回縄文塾 (東京支部第13回例会)
講演

第22回縄文塾を、2001年1月26日(金)、東京・恵比寿の株ジャイアル東日本企画本社13F・A会議室で開催した。講師は、評論家の森本哲郎氏とNHKプロデューサーの菊池正浩氏。今号は前号に続き、森本氏の講演の記録。

●「文字」発見の可能性

三内丸山遺跡は、まだ全体の3割しか発掘されていないが、それでも、既に段階4万箱の出土品がある。私が期待しているのは、これら発掘される残り7割の中から、我々の想像を超えるようなモノが出てくるのではないかと、思うことだ。そのひとつが「文字」である。

なぜ文字か。三内丸山から出土する大量の土器や、他の地方からもたらされたと思われる出土地一たとえば糸魚川産のヒスイ、北海道や長野産の黒曜石などからみられるのは、ここが交易の中心ではなかったかというところだ。交易の際に必要な「荷札」である。「商品」のやりとりには、何を、いくら、どこから運んできたか、交易をおこなう双方にはっきりとわからなければならない。

メソポタミアと交易をしていたインダス文明の各都市からは大量の印章が発掘されている。インダス文字の解読はまだなされていないが、これが「荷札」としての役割を担っていることは間違いない。とすれば、同じような性格を持ったであろう三内丸山から、文字、あるいは記号のようなものが発見される可能性は充分考えられるのではないかと、私は思う。

●世界的な評価を

エジプトのピラミッドやインダスのレンガ都市、メソポタミアのシュメール遺跡、そして、黄河文明の殷墟はいずれも石やレンガで

世界文明の三内丸山
Sannai-Maruyama and History's Great Civilizations

構成され、原形をとどめている。だから、遺跡にたまたまだけで古代世界に足を踏み入れたような感動を抱くことができる。だが、こうした石の文明に対し、日本の木文明は、なかなかそうはいかない。遺跡が目にするのは柱穴や、墓穴、道路の痕跡ぐらいで、先に(前号)述べた「考古学的想像力」を最大に発揮しないかぎり、古代世界に浸ることは難しい。

しかし、それでは、石やレンガを利用すること、木を使って建物を造ること、技術的に比べるとどうだろうか。インダス遺跡はレンガによって築かれた。そのレンガは泥をこねて日に干しただけのものだ。基礎部分は焼いて強度をもたせてはいるが、そうしたレンガを積んでアスファルトで固めておけば、短時間で建築は完成する。ピラミッドの石にしても、ノミで溝を彫ってそこに水を注ぎ、昼夜の温度差を利用すれば、簡単に切り出すことができる。レンガや巨石を、都市構造や大型建築物としてつくりあげるには、たしかに高度な設計が必要であったろうが、技術そのものはさきわめて簡単なものである。

遺跡が巨大であるだけに、石やレンガを使う技術のほうが木を扱うよりはるかに高度だと思いがちだが、じつは木を細工するほうがよほど難しいのである。三内丸山の6本柱を考えても、いったい、どうやって、直径1メートルもある木を切り倒したのか。石斧だけで、はたして可能だったかどうか。さらに伐りだしたら本の木を選び、立てるには、かなり複雑で高度な技術を要しなくてはならない。

もうひとつ忘れてならないのは、発掘品にみる技術水準の高さである。たとえば漆。同時代の中国では河姆渡、良渚、すし遅れた甌山遺跡があるが、これらの遺跡から出た漆工に比べると、三内丸山の漆の厚みが質において水準が高いように思われる。これまで、こうした加工技術はすべて中国伝来と考えられてきたが、果たしてそうだろうか。この出

土品が持つ意味は慎重に検討されるべきだ、と私は思う。なぜなら、漆の技術に関しては、むしろ三内丸山から中国に渡った可能性さえ考えられるからだ。

技術水準の高さといえば、縄文土器も同じである。土器は世界中の遺跡から出るが、縄文の火焔土器ほど力強く独自のデザインは類を見ない。それなのに世界的に有名にならないのは、日本がその土器の芸術的な価値を世界に向かって発信しないからではないか。これまでの発掘調査を踏まえ、日本の縄文文明を総合的に紹介する「縄文展」を世界各地に巡回させ、そこに火焔土器を展示したら、世界の考古学者は驚嘆するだろう。そして、長い間、西欧人の目には中国文明の亜文明としてしか映っていなかった日本に、独自の古代文明「縄文」がある、という認識がひろまっていけばいい。

●「柱」が解く日本文明

縄文人がどのような言葉を使っていたのかは不明だが、弥生時代に入って渡来文化の影響を受けたとしても、まったく別の言語系統になることは、まずありえない。となれば、現在にいたる「やまとことば」には、縄文以来の日本人の思考や精神に結びつく言葉が隠されているとみていいのではあるまいか。私はそのなかでも「ハシ」という語に注目している。

「ハシ」＝「端」という語と同音を持つ「箸」。橋に共通する概念は何か、それは、ある空間の突端から異質な空間の突端を結ぶもの、ということである。「箸」は食べ物と自分の口を結ぶものであり、橋は川を隔てた兩岸を結ぶ。大きな船と岸を結ぶハシケ(舢舨)、空間と空間を渡すハシゴ(橋)もある。そして、ハシラ(柱)。私はこのハシラという語は、地上と天を結ぶという概念から生まれている語であると考えられる。だから、日本の神々に対して使う敬詞は「ハシラ」であり、天地

を結び垂直に立てた木を「ハシラ」と呼ぶのではあるまいか。

三内丸山遺跡の6本柱が発掘されたとき、この構造物の性格について、見張り台であるとか、貯蔵庫ではないかなど、さまざまな意見が出されたが、私は梅津忠夫氏が言われたように、まぎれもなく宗教施設だと考えた。天と地を結ぶために、三内丸山の縄文人たちは、力を合わせて6本の巨大なハシラを立てたのである。

諏訪大社の御柱祭、伊勢神宮の遷宮にあたっておこなわれる心の御柱をめぐる儀式などをみても、太古から連続と続く日本人のハシラに対する心性がうかがえる。日本文明はまさに木の文明であり、ハシラの文明と言ってもいい。三内丸山人があつた6本柱を立てたのは、木によって世界の中心を象徴させたためだったのではないかと私は思う。

●インダスに匹敵する三内丸山

最近の調査で、三内丸山には12m幅の、700～800m続く道路が確認されたが、この道路の広さには驚かされた。インダス河畔のモヘンジョ・ダロ遺跡のレンガを敷き詰めたメインストリートでも、長さ400～500m、幅7mである。三内丸山にモヘンジョ・ダロ以上の規模の道路があったということは、それだけ人びとや物資の往来があったということだろう。この道が海へと通じ、港と集落を結んでいたと思われる。交易の相手は日本列島の各地だけではなく、大陸との交流もあつたに違いない。

三内丸山は、日本の古代について、さまざまな謎を提供してくれる貴重な遺跡である。これからの発掘調査によって解き明かされる謎は、まだまだたくさんあるはずだ。すでに縄文のイメージはこの遺跡によって大きく塗り替えられたが、今後、我々の想像をはるかに超える発見がおおいに期待される。日本は小さな島国ながら、大陸伝来ではない独自の、豊かで高度な縄文文明を持っていた。その姿が浮かび上がり、近い将来、縄文文明を「五大文明」として捉えなおす必要に迫られる日がくるに違いない、と私は期待している。

(要約・抜粋)

三内丸山縄文発信の会
第20回縄文塾(東京支部第11回例会)
講演

第20回縄文塾を、2000年7月7日(金)、東京・恵比寿の勝ジャイール東日本企画本社13F・A会議室で開催した。講師は、東北芸術工科大学教授・東北文化研究センター所長の赤坂憲雄氏。今号は、その時の講演の記録。

●東北学と三内丸山の10年

僕が東北学という新しい学問のスタイルを作ろうと考えたのはもう10年くらい前。これまでの東北の歴史や文化は「みちのく」つまり辺境をかぶせて語られてきた。ところがまさに青春の、東ての辺境の地から5千百年の壮大な遺跡が掘り起こされ、我がが三内丸山という巨大な遺跡に触れたのが、この10年間だった。

我々が教えられてきたのは、京都・奈良や江戸・東京を中心とした歴史を宿した新しい歴史を語り、その時間の中で東北あるいは日本について考えることだ。三内丸山がそのいい刺激剤になってくれるんじゃないか。

●縄文をめぐる考古学と民俗学

さて、これまで民俗学と考古学はと油のようなものだった。考古学はひたすら物にこだわり、民俗学はひたすら物に背を向けて精神世界や信仰、口伝の伝承などにこだわってきた。だから両者が真正面から対話を交わすことはほとんどなかった。

しかも民俗学の世界では縄文を語ることはタブーである。つまり、民俗学では柳田国男以来、中世の応仁の乱あたり以降が対象になっている。せいぜい近世以降だ。それ以前のことは、現在の民俗からさかのぼることはで

東北学と縄文 その1
Tohoku Studies and Jomon Culture Part1

きないと考えられ、現在の山村の民俗と縄文をつなげるような議論は徹底的に排除される。僕はそれを承知で東北に触れ、三内丸山に触れてきた。縄文文化を知らなくては東北の現代の民俗はわからない。いま縄文について語る民俗学者は、日本中で僕一人だろうが、考古学者たちとの対話を重ねる中で、いろいろなものが見えてきている。

僕の勤める東北芸術工科大学の東北文化研究センターの『東北学』第2号で、「国境なき考古学～考古学と民俗学の協同関係」というテーマの座談会を岡村雄雄さんと泉拓良さんをお招きして行った。その中で泉さんが「我々の最終目的は従来の縄文文化・縄文時代の解体、地域と時間による概念、つまりより正確で細かい視点から文化概念をきちんと規定しなおさなければならない。1万年も続いたものを本当にひとつの名前でくくっていいのか」と、ある意味で衝撃的な発言をされている。縄文はすでに自明でなく、解体されなくてはならないと最先端の考古学者たちが語り始めている。

また、この座談会でもうひとつ僕が衝撃を受けたことがある。ある研究論文の中で北海道の礼文島の遺跡が「日本最北の遺跡」とされていたのを受けて座談会で語ったところ、岡村さんが「それは違う」と言われた。我々は日本地図を勝手に思い浮かべながら「礼文島なんだからどうみてもその加工品は南にあるはずだ」と思っていた。ところが加工品は樺太などからもたくさん出土している。

考えてみれば、縄文時代に日本という国家や国境があったわけでもなく、交易圏はそこを中心として放射状に同心円を描いて広がって行くのは当たり前のことである。にもかかわらず考古学者は無造作に「日本最北の遺跡」という。それがいまま完全に壊れようとしている。縄文文化像は国境なき考古学の時代を迎えながら、大きく変更を迫られている。さら

には、1万年の長い文化の流れを「縄文」というひとつの言葉でくくることは可能なのか、大陸にも似た文化があることを考えると、無意識のうちに日本という国家を背負ってきた「縄文」という概念が壊れつつある時代に入っている、と素直に受け取るべきなのではないか。

●環状列石は何を語るか

それにしても、民俗学者は縄文の世界にどのように入り込むのか。秋田県の伊勢堂岱遺跡のストーンサークルについて、考古学的小林達雄さんには「環状列石には、縄文の人々の世界観が表現されている。それは縄文人の心の記念物である」という。おそらくこれは環状列石ないしストーンサークルを語る人々の基本線だろう。遠藤正夫さんは「青森県の小牧野遺跡からは骨を入れた葬祭のための壘障が出ていた。一連の葬送儀礼の祭りの場ではなかったか」と言っているが、我々にとって、常盤レールでは、葬送と祭りは寺と神社という形で画然と分けられている。秋田県大湯のストーンサークルでも、祭りの場であるとい



う解釈と埋葬の施設だという解釈が対立してきたのだが、いつの間にか考古学者たちはその対立を曖昧にしなが、葬送儀礼と祭りの場であるという解釈を語り始めた。

●縄文の世界観を集約

後でも触れるが、縄文時代の人びとにとって、死者を埋葬する場が最大の祭りの場になるという最大のポイントになる。それを押さえないで「葬送儀礼の祭りの場」と無造作にいうのはある種のつまらぬであろう。

伊勢堂岱遺跡に関して、小林克さんは「縄文時代後期の葬式を含めた壮大な祭りの場である」と言っている。大湯の環状列石のまわりの6本柱の建物に関しては、ここで行われた祭りの敷席だったのではないかと、そうでないにしても祭りに関する施設だった可能性は高いという見方もある。なぜなら、大湯のストーンサークルの周辺からはほとんど生活の匂いする遺跡が出てきている。

伊勢堂岱も相当広い遺跡なのだが、人が暮らした痕が全く見られない。小牧野も同様。伊勢堂岱と大湯はほぼ同時期、縄文後期の遺跡で、死者の骨を納めた土器がいくつか見つかったということ、ここが死者たちを埋葬する場所であったということは否定しがたい。同時に、特殊な道具が出てきたり生活の匂いがないことから、祖先を尊び子孫の繁栄を祈る祭りをする場であったと解釈されている。そして、かなり大きな土木工事を、平地をつくり、見る場所、あるいは天体や山などに対する方位の意識も持ちながらデザインされている。環状列石の上には縄文人たちの世界観が表現されていたのだらう。(要約・抜粋/次号へつづく)

三内丸山縄文発信の会
第20回縄文塾(東京支部第11回例会)
講演

第20回縄文塾を、2000年7月7日(金)、東京・恵比寿の勝ジャイール東日本企画本社13F・A会議室で開催した。講師は、東北芸術工科大学教授・東北文化研究センター所長の赤坂憲雄氏。今号は、その時の講演の記録。

●円環と縄文人の関わり

ストーンサークルに関してはいろいろなことがわかってきた。円環に特別な意味を求めているのはおかしいという意見もあるが、数百年も代を重ねながら、数千年離れた河原から石を運んで作り上げたことがわかってのことから、偶然に作られたものではなさそうである。そうすると、その遺跡がなぜ円環を作り出しているのか、円環と縄文人はどう関わりがあるのかという問いかけも可能ではないか。

文化人類学の世界では、円環というのは定住農耕民とともに出現するという一般論があるが、縄文人は定住農耕民とはいえない。小山修三さんが『縄文学への道』という本の中で、「縄文時代の遺物・遺跡の中に、時代を越えて繰り返し出現するパターンがある。それは同心円なのだ」と言われている。

土器の装飾の中にあられる同心円、あるいは北海道の遺跡からは、イルカの頭骨が環状に埋葬された事例が複数見られている。イルカの頭の方を外側に向けて放射状に並べられていた。集落や墓地の中にも繰り返し円環のパターンが登場している。いったいどういふことなのか。いろいろな角度から考えてみたのだが、ここでは大変乱暴な論議をしてみる。「縄文のムラと弥生のムラ」ということだ。小林達雄さんなどは、「縄文ムラ」ということを言われている。岩手県の西田遺跡は、典型的な縄文時代中期の環状集落と言われている。中央には広場があり、周囲に200くらゐの墓が並んでいた。その周りに掘立柱住居群があり、その外側には掘穴住居跡

東北学と縄文 その2
Tohoku Studies and Jomon Culture Part2

そして貯蔵穴群がある。

●縄文のムラと弥生のムラ

とにかく縄文時代中期の典型的な村というものは、中央の広場が共同墓地であると同時に祭りが行われた場所であって、その外側に暮らしと生産のエリア、貯蔵穴やゴミを捨てるエリアがあった。縄文の典型的なムラはまさに環状集落をなしている。

それに対して弥生のムラというのは、環状集落と言われる。つまり環という防壁施設を巡らすことによって、外部の敵から自分たちの身を守る施設をたくさん作る。その中で墓はどこにあったかという、村の外にあった。縄文のムラは、中心に死者たちが埋葬されて、それと接して、生きる人達の暮らしの場が取り囲んでいる。ところが、あるムラでは生きている人達の村は環で囲まれているが、その内側に死者達の空間はなくそれは遠ざけられて外にある。縄文のムラと弥生のムラが死者をどういうふうに関わりかという点において、非常にくっきりとした差異を見ている。縄文は「死を遠ざけることのない文化」で、弥生は「死を壊れとして遠ざける文化」なのではないか。

縄文時代の典型的な大きなムラは、4千年前くらいに消えて行く。ちょうど三内丸山が消えていくこの時期で、それと同時に周辺に小さな村が点々と生まれる。小グループに分散して、それぞれに暮らしやすい土地を求めて集落が分散していく。そして彼らは共同の絆を確認するために、おそらくストーンサークルを必要としたのではないかと。そして、そのストーンサークルは、ある精神的シンボル、モニュメントとして、おそらく共同の労働の成果として生まれた石の円環であった。

縄文の集落が円環をなしていたことが、どういう意味を持つのか。いずれにしても縄文人が円環という形に対して固有の関心を持ち、好奇心を持ち、あるいはこだわりを持って

たということは否定できないだろうと思う。ストーンサークルで有名な小牧野遺跡の近くから水場ができたという報告がある。

その傍らに水場があるのか、その解釈は2つあると思われる。ひとつは神社にある水場のように、俗の世界から聖の世界に入るときに穢れを落とすもの。もうひとつは神話(伊弉諾岐が黄泉の国へ行き、もう死者になっている伊弉諾美のウジだらけの体に触れ、びっくりしてこちらの世界に逃げ帰ってきたときに川のほとりで穢れを落とす)の中にあるように、死者たちの世界で自分が身になった穢れを清め、俗世界に戻って行くというもの。ストーンサークルを神社のような聖なる場と考えれば、縄文人がそこに入るときに水場で身を清めていったかもしれない。あるいはそこが死者たちの穢れ満ちる世界だと考えれば、そこから離れたときに穢れを落とす場であったかもしれない。どのように考えるかによって水場の意味・解釈が大きく変わってくるだろう。

●「屋敷庭」と「両墓制」

東北では、死者たちを埋葬する場所を日常の空間から遠ざける欲望が弱かったのではないかと。青森県下北半島出身の民俗研究者、田中忠三郎さんによると、下北半島の方では自分の家の庭に死者を埋めたという。大切な、血のつながった祖先を遠くには追いやれないということで、庭に埋めておくのが普通だったらしい。死者を壊れと見る人達が、庭に死者を埋葬することはない。この「屋敷庭」の問題を徹底して追いつめていくと、いろいろなものが見えてくるだろうと思う。

民俗学の世界では柳田国男以来、「両方墓制」がとて大変な問題となってきた。両墓制というのはつまり、死者を埋葬する墓(捨て墓)とお参りする墓(参り墓)を分けるという墓制である。これには穢れの意識がくっついていて、死を壊れとして忌む文化が、近世にな

って生んだひとつのバリエーションが両墓制だったのではないかと。分布域を調べていくと、海岸や島、西日本が中心である。東北の本体では両墓制はほとんど発見されていない。

東北の文化というのは死を壊れとして忌むことが少なく、むしろ死者を身近に置きたがる文化ではないか。写真家で民俗学者の内藤正敏さんは「東北には、死者の記憶を繰り返し反すうしながら大切に守る文化があるのではないか」という。イタコのお奇せんかにはまさにそれだ。死をめぐる文化は、どうも東北では縄文以来の伝統を背景にして、弥生の伝統が非常に強く残る西文化とはかなり異なるのではないかと。

●穢れ観と部落差別のつながり

この穢れの問題というのは、被差別部落の問題に密接につながっていく。被差別部落の問題がきびしいのは、当然ながら関西を中心とした西日本だが、東北で差別の問題を考えたとき、どうも西とは全然違うと感じた。歴史的に調べても、中世以前の東北には被差別部落のようなシステムはない。東北は自らの内側から被差別部落を生まなかった土地だということがわかっている。北海道のアイヌや神保も、死や獣皮の処理などに関わる穢れをもって人が人を差別する制度はない。

この問題は、日本文化の中の非常に大きな問題につながっていく大切なテーマと僕自身は考えており、穢れの問題をめぐっての縄文文化の研究もぜひやってほしい。例えばひとつだけ触れておくと、女性はどこで出産したのか、おそらく掘穴住居の中の掘り込みのそばだろうと言われているが、これは大きな問題である。幼くてごく小さな幼児や胎児はどこに埋葬されるのか。これも掘穴住居の入口の裏に埋葬しているらしいということが確認された。

血の穢れやお産の穢れというものも、縄文人はおそらく意識していなかっただろうと思う。つまり我々が自明に思っていることの多くが、1万年の射程の中で考えたと自明でなくなるかもしれない。縄文文化を考えると、これは、単にノスタルジーでも趣味の問題でもなく、我々が現在どこにあること、そしてそこに生きていることアイデンティティを改めて再編するために必要なことだと考へている。(要約・抜粋)

三内丸山
お月見縄文祭
三内丸山で会いましょう
主催/NPO法人三内丸山縄文発信の会

縄文列島東西南北

Jomon sites all over Japan

今年で8回を迎える「三内丸山お月見縄文祭」を、2006年9月9日(土)、青森市の三内丸山遺跡で開催した。今号は、行った育待ちフォーラムの記録。講師を、独立行政法人奈良文化財研究所企画調整部長の岡村道雄氏と青森県三内丸山遺跡対策室長の岡田康博氏が務めた。



環状列石 (ストーン・サークル) / 北海道青森県ノ木遺跡

各地にある環状列石

岡田 縄文遺跡に関する最近の話題として、まず、北海道青森町に所在する鷺ノ木遺跡の環状列石(ストーン・サークル)をとりあげます。この遺跡では、高速道路建設予定地から直径約37メートルの環状列石が見つかりました。これを最初に見たときの印象はどうでしたか？

岡村 残り具合が良く、輪郭にまともについて、並び方が整っていますね。

岡田 江戸時代に降った火山灰が厚さ1メートルほど積もっていますから、非常に保存状態がいいと言えますね。

岡村 この環状列石は縄文時代後期前半の約4000年前のものですね。

岡田 環状列石の隅から大きな堅穴に造られた墓も見つかっています。環状列石は墓だという説についてはどうですか？

岡村 土器を地面に埋めた埋設土器が見つかっていて、その中に遺骨が入っていたと考えられます。円形の石組みは墓で、中心に少し大きめの石が置かれています。お葬式の一部としてまつりをやっている、列石は舞台のようなものなのでしょう。関東・中部地方ではムラの中の広場に墓地を造り、まつりを行っています。祖先や死者と一体となって生活していたんですね。

岡田 鷺ノ木遺跡では、大きな穴を掘ってその中に個人の墓をたくさん造っています。このような例はありますか？

岡村 同じ縄文時代でも時期は少し新しくなりますが、北海道ではこのような大きな穴の中に複数の墓が造られている埋設墓などと呼ばれる例があります。

岡田 関係者の理解があつて、この環状列石は、下にトンネルで高速道路を通して保



存されることになりました。地元でも是非残して欲しいとの声がありました。

岡村 三内丸山遺跡のように保存と活用がうまくいっている例は少ないですね。文化財が地域の方々から支持されれば、予算も増えるのでしょうか？

岡田 次に青森市の小牧野遺跡。この環状列石の特徴は、

岡村 傾斜の高い方を削って、その土で平坦面を造成し、そこに約3000個の石を丘陵の下の川から運び上げて並べています。

縄文人の強い思いが感じられますね。土器も残っていますから埋葬し、そして祖先の供養も。今生きている自分たちの結びつきを確認し合うようなまつりをしていただかな、と思います。

岡田 小牧野遺跡は石を組み合わせて配石を作り、それらがいくつか連続して全体として環状を構成しています。鷺ノ木遺跡は単純に石を環状に配置している。この違いの意味はありますか？

岡村 内と外で分けて、ここが特別の場所



小牧野遺跡

なんだとより強く意識して造ったのが、鷺ノ木遺跡。小牧野遺跡は配石墓を組み込んで、全体としては四角に近い、環状になっている。空間の区画や墓地としての意識の違いが形状の差となって現れてくるのでしょう。鷺ノ木遺跡の方より強い企画性や意図が感じられます。

岡田 北秋田市の伊勢堂岱遺跡はどんな特徴がありますか？



大湯遺跡

岡村 まず、環状列石が4つあるということです。また環状列石の周りにぐるっと建物がついているものがあります。

岡田 なぜ4つあるんですか？

岡村 大湯遺跡には、環状列石が2つあります。縄文社会は例えば西と東の集団など、異なる2つの集団で構成されていたとする、双分制の原理があつたとの説があります。しかし、伊勢堂岱遺跡の4つには新旧関係があります。大湯環状列石も2つが同時期なのか違うのかで問題になっています。発掘調査の結果では、新旧があつた方がいと言われている。結論から言うと、環状列石は墓でありなおかつ集団が結束する場所、共通の祖先をまつる場所でもあり、

同時代には原則としてひとつ、それが、死者がいっぱいになるなどの理由で、隣接する場所に新たに造ったのでしょう。

岡田 仮に4つに新旧があるにしても、100年あるかないかの間に次々と造られていきますね。



環状列石 (大湯遺跡)

岡村 土器は同じ模様のものが作られています。模様は約100年単位で変化すると考えられていますが、100年で4つということになると、ひとつの存続期間は25年になりますので、25年としたら縄文人の一世代のものであることが可能です。

岡田 伊勢堂岱遺跡も小牧野遺跡に近いタイプと言えるでしょう。環状列石の近くにたくさん穴がありますね。

岡村 この大きな穴は一次埋葬用の穴である可能性が高い。何回も掘って埋めた痕跡がある。遺体が朽ちて、骨を取り出して土器に入れて再埋葬する。そのようなプロセスが考えられています。その際の遺体処理のための穴でしょう。

環状列石は何を物語るのか

岡田 環状列石は集団が結束するための施設とありますが、鷺ノ木遺跡では環状列石の近くには住居は見つかっていない。小牧野遺跡は数は少ないものの堅穴住居があり、ムラである可能性がある。大湯環状列石は周辺の確認調査もやっていますが、堅穴住居がある程度まとまりをもって確認されているからムラの中の施設であると言える。

岡村 建物の形式として半地下にしたのが堅穴建物であつて、それに人が住んだのを堅穴住居と言うべき。最近は堅穴住居という呼び方をやめて、堅穴建物という傾向があります。小牧野遺跡では環状列石の脇に堅穴建物が数棟出ています。それが住居なのか、それとも墓守した人の詰め所や埋葬や祭具道具用の納屋のようなものかもしれない。これだけのものを造つたには、堅穴建物が10棟位で、しかも新旧があつたりますので、環状列石の規模に相当するような人びとが全部住めるとは考えられないですよ。

岡田 環状列石がムラの中の施設なのか、外の施設なのか、考える必要がある。

岡村 むしろ、環状列石の周りにある掘立柱建物が住居との意見があり、そちらを検討する必要があります。住居があり、広場があつて、そのまつりの広場を区画するのが環状列石ではないのか。こういうものがひとつ

つの村の単位ではないのかという意見があり、これには心を動かされます。縄文時代中期には環状のムラが結構見つかっています。掘立柱建物ではなく、堅穴建物で構成されることが多いのですが、岩手県の西田遺跡では、掘立柱建物が環状に回っていて、真ん中に広場、そこには墓があつて、それを取り囲むように堅穴が存在する。八戸市の風張遺跡も同様ではないかと考えています。

岡田 環状列石は津軽海峡を挟んで北海道南部、東北北部に多いわけですが、ほぼ同じ時期に関東、中部にもあります。その関係はどうでしょうか？

岡村 山梨県や長野県にも東北地方より古いと考えられるものがありますが、非常にルーズにドーナツ状に石を配置しています。この影響を受け、東北でできんとしたものが出来た。この間をつなぐものとして岩手県北上市の榊山遺跡、一戸町の御所野遺跡があるのではないかと。一方で三内丸山遺跡の環状配石墓も様式的には環状列石の祖型になったと思います。三内丸山ムラに1500年住んで、やがて集団がバラバラに崩壊し、再度小牧野遺跡でつながりを確認し、葬式を中心にしたまつりをする。小牧野は、そんな歴史的解釈ができる遺跡ではないかと大胆に思っています。

(続く)

今年で8回目を迎える「三内丸山お月見縄文祭」を、2006年9月9日(土)、青森市の三内丸山遺跡で開催した。今号は、行った育待ちフォーラムの記録。講師を、独立行政法人奈良文化財研究所企画調整部長の岡村道雄氏と青森県三内丸山遺跡対策室長の岡田康博氏が務めた。途中、会場から、函館市生涯学習部参事3級(南茅部埋蔵文化財担当)の阿部千春氏が参加した。今号は、前号に引き続き、この時の記録。

(前号から続く)
焼失住居と屋根構造

■岡田 北海道斜里町の来蓮1遺跡からは火災で焼失した家が見つかりました。最近、各地の縄文遺跡から火災住居が見つかりましたが、それらからどんなことが分かりますか。

■岡村 まず、黒く見えるところが炭で、薪になって見えるのは炭化材です。6センチ位の丸太が焼けて炭になり、所々に焼けた粘土が出ています。黄色のところは土が焼けた所で屋根に載せたものです。



焼失した復元住居(三内丸山遺跡)

■岡田 遺跡からは建物が焼け落ちた状態で見つかるわけですが、丁度真ん中に炭がないというのはどんなことが考えられますか。

■岡村 例えば、以前三内丸山遺跡の復元住居が燃えたことがありますが、消火活動により骨組みが焼け残りました。通常、木炭は、ドーム状の土カマドで、酸素が供給されない状況で焼きます。それと同じように屋根に土がこぼれていなくて炭にならないんです。焼失住居は、焼けた土と炭化材がセトになっているので、炭化材が良く残っているケースでも、真ん中が抜けるケースが多いです。

■岡田 岩手県一戸町野野野遺跡はどうですか。

■岡村 これも回りに炭化材が残って、真ん中は抜けています。回りに土を厚くかぶせて、上は土が少ない。上に炭化材が残らないのは、天井に煙が抜ける仕掛けがあったのでしょうか。

■岡田 福島県福島市宮郷遺跡はものすごく赤く焼けていますね。

■岡村 炭化材はあまり残っていませんね。



焼失住居/宮郷遺跡

土はがちがちに焼けて煉瓦みたい。全体が黄色、鉄分の多い粘土が上にかぶっている場合は煉瓦のようになって焼け残ります。

■岡田 函館市大船遺跡について、調査を担当した阿部さんに加わってもらい、話をさせていただきます。

■阿部 これは縄文時代中期後半の堅穴住居です。深さが2.4メートル。中に入っ



堅穴住居跡/大船(大船)遺跡

みると、直径9メートル、幅が7メートル。道南の南茅部地域の場合は深さ2メー

ルをこえる堅穴住居はよくあり、1メートル前後と2メートル前後のタイプがあります。一般に縄文時代前期と中期は深いですが、おそらくは2階建てで、下に降りる2層構造になっていると考えられます。

■岡村 深い穴を掘るのは大変な作業ですね。

■阿部 私はこれを一度埋め戻し、春に掘り出したことがあります。遺物はないのでスコップで掘って、10人で20日間かかりました。当時なら相当の努力、それでも深く掘りかかったのでしょうか。

■岡村 火災住居という不慮の火災で燃えたように感じられることから、焼失あるいは焼却住居と呼びたいですね、わざわざ

火をかけた意図的に燃やしたのことが多いと思います。柱も抜いて壊れやすい状態にし、解体するために火をかけたと思います。

■阿部 私も同感です。特に後期の堅穴住居の床面から赤漆塗りの土器や完形の土器が出てきます。意図的に置いて住居を廃棄している。前期や中期の集落ではハマネス遺跡では100以上の堅穴住居が見つかってい

ますがほとんど火災住居はない。中期の大船遺跡では二棟位。これはおそらくアクシデントだと思います。後期になるとかなり割合で焼失住居が見つかります。がに使

った石をわざと抜いてあったり、土器を置いて居るものもあります。また、後期の堅穴住居にも、屋根が土屋根とそうじゃないのがあります。土屋根の方は屋根が燃えて土が落ちたあとと柱が倒れているので、判別できます。しかし、そうでないものもあります。焼かなくて良かったのかどうか、どう思いますか。

■岡村 土屋根だから構造材は炭になり、土屋根じゃないと燃え尽きる。焼却処分している可能性が高い。ムラを放棄する時にムラ全部を焼く場合もあります。北海道ではアイヌ民族が昔から、家を焼いてあの世に送るといって焼くことをしています。

■阿部 焼く住居を焼く意味としては、焼くを焼



復元堅穴住居/野野野遺跡

めているという説と、解体するのが大変なので焼いたという説。また、放棄したままの状態に焼いた場合と、わざと堅穴内に使える道具やまつりの道具を置いて焼い

ているケースもあります。後者は家を送るためのもの。実際に完全な形の土器などを入れて焼くのは、全体の1割くらい。たいがいはい片づけますね。

■岡田 最近では各地の縄文遺跡では土屋根で復元の例が多く、縄文時代の家は土屋根というイメージが強くなっていると思います。

■岡村 土屋根の堅穴が焼かれるから、焼失住居だと認識できます。焼かれていない堅穴がそもそも土屋根かどうかを判断するのは難しい。

■阿部 前期や中期と後期では屋根の構造が違うようです。また、後期でも土屋根とそうでないものがありますから、例えば夏の家は土屋根ではなく、冬の家は土屋根といった使い分けがあるのかもしれませんが。

■岡村 三内丸山遺跡でも最近、焼失堅穴建物が発見されましたので、様々な視点からぜひ検討していただきたい。

貝塚からの出土品・集落との関係

■岡田 次の話題に移ります。これは佐賀県佐賀市東名貝塚です。現在の地面から7メートルほど下から縄文時代早期の貝塚



出土品/東名貝塚



出土品/東名貝塚



出土品/東名貝塚



出土品/東名貝塚

が見つかりました。貝塚は当時の海岸線に沿って作られていました。ここでは貝塚以外にもたくさん貯蔵穴が見つかります。貯蔵穴からは木製品や編み物が見つかるのですが、編み物は日本最古のものです。

■岡村 これは木を細く裂いたもので編んでいます。

■岡田 青森県八戸市の長七谷地貝塚も早期の貝塚です。ここからもいろいろと骨角器が出ています。

■岡村 釣針と鉋ですね。北海道から、八戸、宮古まで分布する北系統の珍しい鉋であり釣針です。鉋は獲物に突き刺さると、縄に結ばれた鉋の先端の部分が柄からはずれて体内に残り、獲物が弱のを待って仕留めるといったものです。

■岡田 貝塚というみんな同じといった印象がありますが。

■岡村 例えば、貝製の腕輪を作る特殊な遺跡があります。宮城県だとアカガイで作る。他にも岩手県久慈地方ではコハクで玉を作るとか、黒曜石やヒスイなどの各地域の特産物でブランド品を作り、かなり遠い所まで移出している例が頻りにみられます。

■岡田 集落との関係はどうでしょう。

■岡村 貝塚とは貝が目立つ生ゴミ捨て場のことです。貝がなかったらただのゴミ捨て場。ゴミ捨て場も場所を特定していますが、現代の民族例と同じようにゴミが山になると臭かったり衛生的でないためムラを放棄したのでしょうか。

■岡田 単純なゴミ捨て場にしては規模の大きなものもありますね。

■岡村 自分の家

より高くなる場合もあります。当時も屎尿処理とゴミ処理は最大の課題だったと思います。

■阿部 基本的に貝塚と盛土遺構は同じもの。広い意味でゴミ捨て場、廃棄場所ですが、物の魂を送る場所だとも思います。それと、単一の集落の廃棄場所と、いくつかの集落共同のものがあります。函館市垣ノ島遺跡には後期の長さ120メートル、幅100メートル、高さ2メートルのものが残っています。大規模集落が周辺に分散しましたが、その人たちが集まって共同の送り場にしたものと考えられます。

■岡田 関東地方には大規模な貝塚が多く、中には貝の加工場やカキの養殖の痕跡と思われるものがあるそうです。

■岡村 東京都北区に、かつての東京湾の奥の波打ち際に、1キロにわたって5メートルも貝が積もった中里貝塚があります。ほかにも東海地方の豊橋周辺、千葉の市川周辺に浜貝塚と呼ぶ、干し貝作りの加工場のゴミ捨て場があった。浜遊で貝むき作業をして産業廃棄物として捨てたんですね。中里貝塚では波打ち際に浅く穴を掘って、粘土を敷いて水が漏れないようにし、焼けた石をぶちこんで沸騰させ、貝を蒸して口を開かせる施設を作っていました。また、杭を波打ちぎわに並べて打ち込み、それを利用してカキを養殖していたと考えられます。

■岡田 縄文遺跡は日本列島に数多く分布していますから縄文列島と呼ぶことができます。縄文列島の中で三内丸山遺跡の位置付けを考えていきたいと思っています。(要約抜粋)



貝層断面/長七谷地貝塚



北の縄文文化を語る

A Dialogue about the Culture of Jomon Times in

第47回縄文塾を、2004年12月4日(土)、青森市の東奥日報社新町ビルで開催した。講師は、文化庁記念物課文化財調査官の岡田康博氏と、秋田県埋蔵文化財センター北調査課課長の小林克氏。今号は、前号に続き、「北の縄文文化を語る」をテーマにした対談の記録。

変化していくストーンサークル

岡田 ストーンサークルには、石の下に墓があるものと、ないもの、大きく2つのタイプがあるのではないか。

小林 秋田県の場合、鹿角市の大湯環状列石では、構成する組石のひとつひとつが「墓」だということがわかっている。北秋田市(旧鹿角町)の伊勢堂岱遺跡は、墓地であったところに環状列石が作られ、列石ができてから内部に墓が作られている。

岡田 青森市の小牧野遺跡では、配石の下には墓はないようだ。しかし、ストーンサークルの中には人骨を入れたと思われる遺骸があった。

小林 小牧野遺跡や伊勢堂岱遺跡は、ストーンサークルの存続期間が非常に短い。しかし大湯環状列石は長い。ある先生は、ストーンサークルの作られ始めは、小牧野遺跡や伊勢堂岱遺跡のような形であり、やがて墓地として埋葬を重ねるようになり、石を追加していき、大湯環状列石のような形になると言っている。大湯はそういう意味で、墓石が集まった形であり、小牧野遺跡や伊勢堂岱遺跡の非墓地型は環状列石のできたての形だと考えられる。

岡田 東日本の場合、ストーンサークルは、

約4000年前から、多く作られるようになる。石が多く使われているストーンサークルほど長く使われたというのだろうか。大湯環状列石はそういう意味で、ほぼ完成形に近いと言えるのかもしれない。ただ、終わりはないのかもしれない。

小林 仮説として、ほぼ完成形と言っていたら、ただ、米代川流域では伊勢堂岱遺跡を含め、建物や窪地など、遺跡の性格を検討できる材料が多く見ついているため、それも合わせて、ストーンサークルを考える必要がある。

岡田 北海道森町の鷺ノ木5遺跡は、北海道で最大規模の環状列石として注目されている。火山灰で覆われているために、ほとんどが乱を受けていない。本州の環状列石は、耕作などの理由で、石が動いている場合が多い。ストーンサークルの



隣には直径10mほどの堅穴墓城が見つかった。遺物も副葬品が多いという感じだ。同時代の本州で見つかった墓とは少し違った感じがある。

葬送儀礼の場所か

岡田 ストーンサークルの外側に建物がある事例もあるが、何のための施設だろうか。

小林 最初は葬式が絡むような儀礼の場だろうと言われていた。ところが堅穴住居跡が見つかっていないことから、暮らした場所ではないかという説も出ている。まだ議論の決着はついていない。

岡田 しかし建物と一緒に堅穴住居が見つかるストーンサークルもあることから、住居とは違う施設と考えるべきではないか。堅穴住居は、大湯環状列石は少

し離れたところにあるし、小牧野遺跡にも少ないが見られる。それらは、ストーンサークルを管理する人の住居ではないかとも考えられているようだが。

小林 環状列石の外周で見つかる建物について、私は、三内丸山遺跡で見つかった420mの墓列に連続する6本柱の建物群の系譜関係があるのではないかと考えている。

岡田 祭祀的、宗教的な性格の建物で、それは人をあの世に送る、葬送儀礼の場所か?

小林 はい。ストーンサークルが墓と切り離せない関係なのは確かだと思う。

岡田 伊勢堂岱遺跡の場合、窪地に遺体を埋葬してから、後に骨を掘り出して、別の場所に埋葬していると考えているようだが、それはストーンサークルの中に埋葬する場合もあるのか?

小林 内も外も両方ある。

岡田 埋葬してから骨になるまで結構時間がかると思うが...

小林 どのくらいの時間を置いて掘り出すかは分かっていないが、このようなタイプは、青森県内にも多い。遺体を葬り直すやり方が、この時代の青森や秋田でさかんに行われたようだ。伊勢堂岱遺跡には、何度も掘り返して埋めてを繰り返していた形跡がある。

交流と結束のために

岡田 全国でのストーンサークルの検出例は、それほど多いわけではない。ストーンサークルが作られる場所というのは、どんな性格の場所なのだろうか。

小林 例えば伊勢堂岱遺跡の場合は、米代川と小瀬部川の合流点。大湯の場合も大湯川と米代川の合流点から少し離れた場所。大師森は津軽平野と十和田湖との分水嶺。交通の要所、あるいは地域を隔てる境目にあるのではないかと。

垣ノ島A遺跡

Kakinoshima-A (Minamikayabe-cho, Hokkaido)

北海道南茅部町

阿部千春 CHI HARU ABE

南茅部町教育委員会埋蔵文化財調査室長
Manager, Buried Cultural Properties Study Office
Minami-Kayabe-cho Board of Education



●馬蹄形盛土をもつ集落跡

北海道南茅部町において、垣ノ島地区は最も遺跡密度の濃い地域として知られており、これまでに9000年前の漆製品が出土した垣ノ島B遺跡や、縄文時代早期の子どもの足形が付いた17点の土版が出土した垣ノ島A遺跡が調査されている。

将来的に垣ノ島地区の開発が予測されるため、遺跡内容を事前に把握しておくことを目的として平成15年度から試掘調査を開始した。

調査の結果、垣ノ島A遺跡から縄文時代後期初頭(約4千年前)の「コ」の字に近い馬蹄形盛土をもつ集落が確認された。

盛土の規模は、短軸方向96m、長軸方向120mで、盛土幅は約15m。盛土頂部と盛土内側の高低差は1.5~2m程度で、現存する馬蹄形盛土をもつ集落跡としては国内最大級である。

「盛土」とは、使用しなくなった土器や石器などの道具類を廃棄した場所であるが、貝塚と同

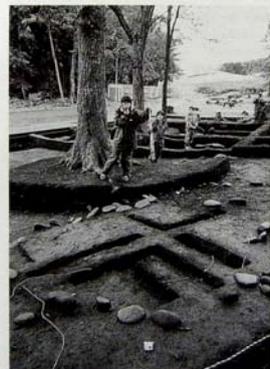
様に、単なるゴミ捨て場ではなく、アイヌ民族に見られる「送り」に類似した儀式(生き物や道具の魂を送る)の要素があると考えられている。そのためか、盛土の調査では膨大な量の土器や石器等の遺物が重なり合うように出土し、火を焚いた跡も確認されている。

盛り土内側の平坦部は、集落を形成する前にロー層まで掘り下げられており、後期初頭の堅穴住居跡が複数切り合っている状況や掘立柱建物の柱列等が確認されている。また、盛土開口部にはプラスチックピットや土坑群が確認されている。

盛土の規模については概要を把握できたので、今後は、盛土外側の平坦地や沢地を調査し、集落全体を構成する関連施設の状況を確認する計画である。今後の調査によって、縄文時代における祭祀と日常のあり方の一端が分かることを期待している。



岡田 近くにムラがない。あるいはあったとしても家が散軒しかない。ということは集落の中にある施設と考えられなくて、ムラから離れたところを作る施設というのが一般的なのか?



小林 はい。縄文時代後期や晩期になると、一つの場所に長期間集住して住むということはなくなる。人々は分かれて、もっと小さい集団になって住むようになった。けれどもお祭りやお葬式のようなことは、地域のつながりを確認しておく必要はない。それで交通の要所、地域を隔てる境目など、人々が集まりやすい場所に、祈念物として環状列石を作り、季節的に集まったのではないかと考える。それが米代川流域では、大湯環状列石や伊勢堂岱遺跡なのだとする。

岡田 自分達の結束を確認する、強める。そういう場所でもある。石を苦労して遠くから運んでくるといふことも、一緒に作業するという点で、意味がある。

小林 大湯の場合だと、十和田湖近くの安久谷川からだから、7キロくらいある。そこから石を運んできて、そこへあれだけのものを作ったということ。単に一つの集落がそこで生活して、墓地を抱えていったということではなさそうだ。地域全体が集団としてまとまらないうち、作れなかったのではないかと。

岡田 ストーンサークルは最終的には「墓地」になっているが、元々は祖先を崇める「まつり」の場所だったかもしれない。北海道の鷺ノ木5遺跡はまだ若いストーンサークルと言えるだろう。大湯環状列石はもう成熟したストーンサークル。石もその都度持ちこんでいて、あのようにきれいに見えるのは完成形であって、最初はまばらであったり、多いところや少ないところがあったりした。鷺ノ木5遺跡はあのままずっと使われていたら、もっと複雑なものになっていた可能性がある。

小林 そうやってどんどん変わっていったと思う。出入り口がついたり、石が追加されたり、日時計みたいなものがついたり。

ストーンサークルは、北東北地方に限定されると思っていたが、関東中部や長野県でも見つかるようになってきた。ところが東北地方の南部にはない。ストーンサークルのかたちは地域によって違う場合もあるが、何かそういうものを生み出す社会のあり方に共通のものがあるのかもしれない。

岡田 それらが地域の中でどのようにして生まれていったのか、系譜を調べる必要がある。

(要約・抜粋)

三内丸山遺跡～10年の通過点～

At the Moment of 10 years after Sannai-Maruyama Site Discovery



列状墓の発見

集落中央から東側(海側)に延びる道路に沿って、その両側に列状に墓が並んでいることが確認された。総延長420m以上にもなる、縄文遺跡では例のないきわめて長大なものであった。これらの墓は地面に楕円形もしくは小判形の穴を掘って遺体を埋葬したもので、長軸が道路と直交するように並列して配置されている。墓の底面がともに道路側に低く傾斜するものが多いことから、道路北側の墓は頭が北向きに、南側は南向きに道路を挟んで向かい合わせの状態で見られる可能性が高いものと考えられた。埋葬された当時は盛り土され、すこし周りより高いマウンド状となっていたことも確認された。

墓の大きさは80cmから2m位まで幅がある。調査開始当初、小型の墓は屈葬で埋葬されたためと考えられたが、縄文人の身長に近い大きさの墓もある程度見られることから最近では伸展葬で埋葬されたものと考えている。もし伸展葬だとすれば日本列島の中でも比較的早い時期に東北北部では伸展葬が流行したことになる。小型の墓は身長の小さい、幼くして逝った子ども達の墓と理解されよう。墓穴の底には壁に沿うように溝が回るものがあり、この溝に板を差し込んだ棺のようなものの存在が想定される。

副葬品は狩猟具である鏃や食料加工具である磨石や敲石があり、これらは別々の墓から出土する。前者は男性の墓、後者は女性の墓と見られる。唯一、当時貴重であったはずのヒスイのペンダントが出土した墓があるが、大きさや形状も他の墓とは変わりがないことは縄文社会を考える上で興味深い。

階層社会か

これまでの調査で確認した墓を大別すると、集落の東側は地面に穴を掘った土坑墓で、西側ではその土坑墓がやや大型で、周りを石で囲んだストーンサークルが伴う。東側でもストーンサークルを伴う墓があるが規模は小さく数も少ない。

これらの墓はほぼ同時代のものと考えられることから、集落の西と東では違うタイプの墓が作られていたことになる。この違いは何を意味するのであろうか。ひとつの仮説として、西側と東側では埋葬される人の社会における立場や位置の違いによる緩やかな階層社会を示すものではないかと考えている。

階層社会といっても特定個人に権力が集中する社会ではない。おそらくは長老と呼ばれる人々で、生活する上での知恵や技術、豊富な経験を備え、集落の人々からは尊敬されていたことであろう。時には祭祀の進行や管理もしたかもしれない。西側はその長老達の累代の墓で、三内丸山集落を守り支える人達の眠る場所として集落の最も奥に置かれたものと推測できる。近くを歩くと、見える斜面に、しかも風化しない石を使い常にその墓がわかるようにすることによって、同胞意識を高めるとともに村人達の精神的な結び付きをより一層強くする効果もあったものと思われる。

縄文社会は原始社会であり、原始社会は階層未分化の平等社会であると考えるのはあまりにも短絡すぎで、すでに階層社会へと移行していた可能性が大きいと考えている。